

種宗教の調和に想及したる形跡あり、出定後語の末に曰く、諸法相雖萬、其要歸于作善、苟能守其法、厚于作善、乃奚擇彼此、佛亦可也、儒亦可也、苟作善者一家之と。然れども、彼は如何にして、之を調和すべきかに論及せず、故に嚴格の意義に於ける宗教調和の代表者と爲すを得ず。將來に於て、この規畫、必ず繼いで起るものあるべし。

服部蘇門、名は天遊、字は伯和、又嘯翁と號す、通稱六藏、京都の織戸なり。多病を以て、家資を族人に譲り、唯だ讀書を勉め、二十五、徒を聚めて、教授し、又長嘯社を創す。その學、漢魏の傳注を主とし、専ら博洽を務む。年三十八、自ら髡して、緇衣を服し、佛乘を研究し、また老莊を講じ、意を通釋に專にす。然れども、經史を以て門下に授くること、常の如く、因つて自ら三教主人と號す。はじめ、徠門の説を慕ひしが、一旦翻然、その非を悟りし後は、物氏を攻むるを以て己の任となし、他を呼んで無眼の人となす。明和六年歿す、年四十六。その著、燃犀錄、同續錄、同別錄、同餘錄、同遺錄、落草放言、續放言、赤裸々、碧巖方語、解蘇門文鈔、前戲錄、後戲錄、嘯臺餘響、同遺響等あり。

燃犀錄、すべて断片的議論を蒐集せしものに過ぎざれども、越園の紕繆を指摘し、徵證明白、その辨、頗る明確なり。徠と雖も、必ず肯服すべく、天遊その人、學博くし

て見高きこと、因つて概知すべし。試に一條を引かむか。

明の七才子といふは、詩を以て稱するところにして、文を以て稱するには非ず。その子細は、謝茂秦は、詩に長じたれども、文は言ふに足らず、又宋子相の詩は、徐子と同調なれども、文は臭味、大に異なり、決して七子と並べ稱すべき様はなし。然るに、右の七子の名、大に世に噪ぎし故、文に於ても、稱せまく欲し、遂に右の七子の中、謝と梁とを省き、汪道昆、王稱登を加へたるは、皆後人の所爲にして、本來然るに非ず。日本の學者、かやらの譯をわきまへず、七子とは、詩文ともに稱する所なりと意得たるもの多し。他の學者は、論ずるに足らず、歴々物門の高弟と呼ばれる人にも、右の意得違えありて、文に作り、書に筆して、世に傳ふるは、何としたる鹵莽ぞや。徠も、又傍觀して居りながら、其誤を正さざるは何ぞや。

赤裸々は、出定後語の後塵に歩するものにして、その中、左の一節、最も觀るべし。

すべて華夷の隔なく人あれば、こゝに教あり、而して各風土民俗に従つて教を立つること、同じからず。然れども、皆天を宗とするに於ては、一轍に出づるが如し。夫れ天は萬物の上に在り、至大至尊、窈冥測るべからず、尊嚴之に過ぐるものなし。



故に諸教之を尊んで宗とす。儒には曰く天命、曰く天道、曰く畏天、曰く則天の類を始め、六經語孟皆天を尊ぶに非ざるものなし。老子は、方外の道なりと雖も、猶ほ且つ天の道有餘を存して、不足を補ふ、天網恢恢疎而不失の言あり。又我國の神道も、其初を天神に托し、其居を指して高天原と稱す。天竺外道の教、皆生天を以て果とせり。西洋の耶蘇宗門の如きは、我國に嚴禁ありて、今其教如何にも知り難しと雖も、すでに天主教と稱すれば、又天を尊ぶ教と見えたり、唯だ佛法のみ、天を尊ばずと。

仲基の出定後語は、佛經聖典の批判にして、諸經の眞贋を辨じ、往々にして歐西學者の説と符合するところあり、蘇門の赤裸々、平田篤胤の出定笑語、及び二三僧侶の撰著、皆及ばず。たゞ何れも、異色の學者たるに於ては一のみ。

## 第十八章 折衷及び考證學派

折衷學派は、諸派軋轢の劇甚なりし反動として、新に興起し、漢唐宋明、合せて之を取らむとするものにして、伊物二子の固僻なるに似ず、又如何なる學派とも調和し易きものなり。而して、其首に居るものを細井平洲となす。その時を謂へば、該國の學、正に中するの時なり。

細井平洲、名は徳民、字は世啓、通稱甚三郎、又如來山人と號す。その遠祖は、文學を以て宇多醍醐の二朝に事へし紀長谷雄なり。父正長、尾張智多郡平洲村に在りて農を事とし、二子を生じ。伯は甚兵衛、正方、叔は即ち平洲なり。平洲、享保十三年を以て生る。幼より大志あり、農に服するを欲せず、年十六、京師に遊び、師を求めしも得ず、留ること一年にして、郷に歸つて、書を讀む。父母將に田を分つて、其資となさむとす。平洲曰く、見、農に非ざるを以て、田は用ふるなしと。之を聞いて、二百金を獲、盡く書を購ふ。この時に方り、中西淡洲、名古屋に於て、叢桂社を結び、諸生を教授す。平洲一見、大に悦んで曰く、圖らざりき、我師の邇きに在らむとはと。遂に贊を納



れて、弟子となる。年十八、長崎に遊び、小河仲栗を主とし、飛鳥子静と友たり。三人兄弟の交を結び、相與に切磋すること三年、平洲偶々其母の病を聞き、即ち東歸せしも及ばず、哀悼の餘、病を得、屏に在ること歳餘。年二十四の時、その師淡淵社を江戸に移す、平洲亦た之に従つて往き、帷を下して教授す。當時平洲甚だ貧窶、その兄亦た故ありて産を破る。因つて、父を尾張より迎へて、孝養を盡す。すてにして、仲栗子静、皆長崎より來り、平洲と同居す。子静なほ娶らず、平洲仲栗ともに妻子あり、三家同住、年を経、一も間言なかりしといふ。

すてにして淡洲歿す、平洲乃ち秋山玉山、瀧鶴、臺澁井太室、南宮大湫、木下蓬萊等と交遊して、經術を究め、後進を誘掖するを以て己の任となし、名聲日に隆、弟子大に進む。こゝに於て紀州の香巖公、米澤の鷹山公及び列侯貴戚、之に師事するもの頗る多し。はじめ、淡淵の經を講ずるや、漢唐新古の異同に拘らず、人の求むところに従つて、或は漢唐の傳疏を用ひ、或は宋明の注解を用ふ。仍つて仁齋徂徠が漢唐諸儒の誤謬を指摘し、之を排議せしを以て、己の力量を知らざるものとなし、常に曰く、聖人の道は、學問の深淺に在らずして、全く成德育才、その器用を盡すに在りと。平洲

の經を説くや、専ら師訓を守り、大義を主提して、字句に拘泥せず。常に曰く、天地ありて後に人あり、人ありて後に聖人あり、聖人ありて後に聲經あり、聖人の人に於けるや類なり。今類を以て其書を讀むに、不言の妙あり、その間に存す。夫の妙は思ふて得べきも、掲げて人に示すべからず。故に古今の注家、之を章句に釋くといふは、可なれども、之を經と釋くといふは、未だ可ならず。之を經を釋くといふは、尙ほ可なれども、その以て今日に施すべきに至りては、未だ盡さざるなりと。又曰く、聖學の要は、徳を成すに在つて、學派に在らずと。故に平洲の門に在りては、學派の區域あることなく、人をして、その好むところに従つて、之を講ぜしめ、唯だ材徳を成就するを期するのみ。

平洲固より政治の才あり、諸侯之に問ふに國政を以てす、而して、その爲に謀畫せしところ、終身外人に謀らず、往復の書、又稿を存せず。故を以て、今その詳を知る能はず。四十四歳の時、米澤に赴き、留ること一年、鷹山公、以て一國の師表となす、後來公の治を稱するもの、平洲與つて力あり。四十九歳の時、米澤の學校興讓館、新に成る。平洲又往いて留ること一年、その政を定めて歸る。五十三歳の時、はじめて尾



張侯に謁し、その知遇を辱うし、大に學政を振作し、寛政八年、又米澤に赴き、留ること五旬にして還る。享和元年歿す、年七十四、天保六年に及び、その嗣世克、遺稿を整理して上木し、名づけて嚶鳴館遺草といふ、觀るべきもの少しとせず。

平洲の人となり、温厚の君子にして、且つ治民に長ず、故を以て學界の論争と殆んど相關せず。之に次ぐものは、片山兼山、山本北山等にして、先づ菴園學派を攻めて、自己を標榜するを主としたり。菴園の衰亡は、主として、此に起因す、而して、兼山は、實にその初、菴園の末流に浴し、後之に叛きしものにして、要するに、一般古文辭に厭きたる趨勢を表示するものなり。

片山兼山、名は世璠、字は叔瑟、通稱は東造、享保十五年を以て、上野國平井村に生る。家世農を業として、資産あり、十七歳江戸に遊び、鶴殿本莊に從つて學び、その塾中に寄宿す。本莊は、服部南郭の門人、最も修辭に長じ、菴園一派の推重するところとなりしものにして、自ら處ること亦た頗る高く、許可するところ極めて少し、而かも、兼山を遇すること、獨り厚く、兼山又之に服し、益す修辭を研精せしが、固よりその嗜好するところに非ざりしを以て、翻つて經義に究め、日夜怠らず。すてにして、兼山の

介を以て、南郭の門に入り、秋山玉山と交驩す、玉山將に熊本に歸らむとするや、兼山が篤學にして、貧困なるを憫み、本莊と相謀り、之を熊本に携へ、藩學時習館に寄宿せしむ。幾もなくして、生員に充てられ、十人扶持を受けしが、居ること數年にして、辭して去る。こゝに於てか、京阪地方を漫遊すること一二年、一も其意に當るものなかりしを以て、再び江戸に往きて、本莊の家に寓し、深く菴園の學を究め、特に經義に長ぜり。兼山かつて本莊の介を以て、宇佐美瀧水に謁す、瀧水は親しく、徂徠に學びしものにして、經義を以て專務となし、師説を維持するを以て、その任となせり。瀧水、兼山の篤學なるを見、本莊と相謀りて、その義子となす。時に瀧水、出雲侯の侍讀たり、兼山も亦た同藩の儒員に蔭補せらる。居ること數年、その學殖、益す深く、竟に疑難を徂徠の說に生じ、反復熟考、一旦大に悟るところあり、將にその濫蓄を辨明せむと欲し、之を瀧水に問ふ。瀧水たゞ師説を信じて、その得失を論ぜず。多方回護して、其言を然りとせず。兼山乃ち經史に考證し、誤謬を糾正し、是非を明晰にす。瀧水窮して、復た争ふを欲せず。兼山亦た意を枉げて、苟くも從ふを欲せず、遂に本姓に復歸するに至れり。時に旗下の兩番に遠山修理といふものあり、兼山を招き、



裏四番町の自邸に居らしめ給するに衣食の料を以てす、時に安永元年、兼山四十三歳といふ。こゝに於て、生徒の來集せるもの漸く多し。兼山、修辭の學を厭棄し、専ら經義を教授す、その學、古注疏を以て子弟に教授すと雖も、固より、之に拘泥せず、折衷學といふもの、始めてこゝに起る。こゝに於て、井上金峨、豊島豊洲、山本北山等、相繼いで、熈澹相和し、遂に一大學派を形成するに至れり。是れかつて前に述べし如く、氣運の然らしむるところ、世を舉げて、護國一派に倦きたる結果に外ならずと雖も、兼山及び金峨首唱の功、固より其多きに居るといはざるべからず。

兼山、澁水を辭してより、その死に至るまで、僅に十二年、講學長からずと雖も、聲價愈よ高く、人と爲り、豪邁卓宕、好んで窮達を誹議せしを以て、之を妬忌するもの亦た少からず。唯だ村上笠間安中、壬生鳥羽犬山の六侯、己を卑うして、之を聘し、弟子の禮を執つて、經臨を受け、又厚祿を以て、之を招致せむと欲す、兼山肯んぜず。會ま之を尾張侯に推舉するものあり、兼山侯の好學を聞き、細井平洲と同じく、謁を釋かむとす、而して、平洲其地の産なるを以て、先つて徵引を蒙り、兼山は江戸の邸館に參謁し、群書治要校定の任に與りしが、幾もなくして、喘痰を患ひ、功未だ竣らずして歿す、

時に天明二年三月、年五十三。

兼山纔に知命を過ぎて逝きしと雖も、門下の才俊、少からず。陳毅、山村ト、總萩原大籠、小林龍山、葛岡久保、筑水菅葛、陵等、皆師説を祖述して、終始變ぜず、號して山子學といふ。兼山の著、その學を觀るべきもの、山子垂統あり。

井上金峨、名は立元、字は純卿、享保十七年を以て江戸に生る。父祖皆醫を業とす、金峨業を改めて儒生となり、駒込に僑居し、帷を下して教授す。はじめ、西條侯の文學川熊峰に従つて、伊藤氏の學を修め、後又井上蘭臺の門に遊び、物氏の説を窺ひしも、兩つながら服する能はず。こゝに於て、別に一新機軸を出し、訓詁は漢唐を取捨し、義理は宋明に出入し、就中詞章に於て、護國の陋習を排撃し、詩は中晚兩唐を取り、文は韓柳歐蘇を推す。近世詩文の醇正、金峨之を啓きしものにして、江戸の學風、爲に一變せり。金峨、東叡王府に仕へて、その記室となり、天明四年、恕に従つて、日光山に居り、留まること數日、途中病を獲、駕に先つて歸り、遂に其年六月を以て歿す、年五十三。門下名あるもの、尾崎稱齋、蓋鳩、陵梅、澤西郊、原狂齋、篠本竹堂、岡四溟、熊箕山、菊池南陽、吉篁墩、劉桂山、下田芳澤、菅東海、龜田鵬齋等あり。その著述の重要なるもの、



辨疑錄、讀學則經義折衷、匡企錄等あり。

山本北山、名は信有、字は天爵、通稱は喜六、家世幕府に事ふ。北山夙に父を興ひ、ひとり母と居る。はじめ、山崎桃溪に従つて、句讀を受けしが、その後、常師なく、漢宋の學を合せて講究し、又堀川牛門の説を窺ふ。而かる後、井上金蛾の折衷説に服して、その誨督を受く。北山家素より富饒、常に奇書を購求し、その學、大に進む。年二十、孝經集説を著し、その名はじめて高し、故に金蛾師を以て居らず、屢ば勸むるに人の門牆に立つべからざるを以てす。こゝに於て、自ら一格をなし、經説は孝經を以て根據となし、文は韓柳を以て歸宿となし、詩は宋の清新を尙ぶ。この時、越園の餘派、なほ頗る盛なり、北山因つて作詩志、毅作文志、毅の二書を著し、大に李王を排撃す。その學、博通精核、天文兵籍五行小説より、醫卜道儒雜家技藝に至るまで、講究せざるなし、四方の士、風を聞き、笈を負うて從遊するもの、數百人。北山、名は幕府の士籍に在りと雖も、人と爲り、豪邁矯強、卑職に居るを耻ぢ、資錢を輸納して、終身職に就かず。寛政中、柴野栗山、幕府に召され、大に學制を變更し、程朱の學に非ざれば、悉く目して異端となす、北山、市川鶴鳴、豊島豊洲、家田大峰、龜田鵬齋と五鬼の名あり。然れども、

持説を變ぜず、文化九年歿す、年六十一。私に諡して述古先生といふ。北山、名望頗る隆。秋田侯、問ふに國事を以てし、亦た爲に盡すところ、少からず。こゝに至り、侯の博弔、禮に越えたりといふ。その著、凡そ三十餘種、學術淵源考、學派考、孝經樓漫筆等、最も觀るべし。子謙、字は公行、綠陰と號し、家學を受く。

太田錦城、名は元貞、字は公幹、一字は才佐、明和六年を以て、加賀大聖寺に生る。父玄覺、本草に精通し、醫を業とす。錦城幼にして穎悟、五歳はじめて字を識り、十一歳詩を作り、十三歳經史を講説し、郷里號して神童といふ。錦城夙にその兄伯恒に従つて、家學を修めしも、方技の人たるを甘んぜず、遂に四方に遊學するの志あり。この時、京都に皆川淇園あり、江戸に山本北山あり、ともに大儒と稱せらる、錦城先づ西遊して、淇園に學びしも、意に滿たず、乃ち東行して北山に従學せしも、亦た此の如く、因つて慨然として、獨力之を古人に求む。人と爲り、志氣豪邁、肯て人に屈せず、故を以て權門貴族の知を得ること少し。ひとり官醫多紀桂山、之を容る。桂山、博學洽聞、その名、關東に震ひ、且つ客を愛して、士に下り、一時知名の士、多く從遊す。桂山、錦城の才學を嘉し、子弟をして先づ業を受けしむ。錦城の家をなすに至りしもの、桂



山の力、與つて其多きに居る。

錦城、學問淵博、百家の書、讀まざるなく、就中經學に長じ、考據に密なり、元と宋學を尙ぶと雖も、その見の合はざるものは、辨難して餘力を残さず、竟に自ら一家を樹立するに至れり。はじめ、水戸侯、その奇才を聞いて、之を聘せむとせしが、沮むものありて果さず、吉田侯、之を招致して優待す。加賀侯、錦城が自國の産なるを以て、必ず之を致さむと欲し、屢ば吉田侯に請ふ。吉田侯、肯んぜずして、其祿を倍す、然れども、遂に峻拒すべからざるに至り、錦城に命じて加賀侯に事へしむ。錦城、亦た父母の國なるを以て、喜んで之に應じ、祿三百石を受け、上士に班し、職事に與らず。文政八年歿す、年六十一。六子あり、その三子晴軒、家學を受け、吉田侯に事ふ。錦城著述多く、九經談、疑問錄、仁說三書、梧窓漫筆等、最も觀るべし。

その他、折衷派に屬するもの、其人なきに非ざれども、多くは言ふに足らず。而して注意すべきは、その末流、考證學に入りしことあり。これより先、金峨の門、吉田篁墩あり、はじめて考證一派の學を安永天明の間に唱ふ。長崎の賈舶、近世清人の書を傳ふるに及び、この學、益す滋蔓せり。蓋し、清代考證の學は、要するに、漢唐の注疏

は本づき、その程度と範圍とを推擴せしものに外ならず、宋明を排すること甚しく、加ふるに、精密を以て其勝を擅にするものなり。時勢の遞降は、蕪雜なる折衷學を一變して、道般の態度を標榜するに至らしめき。徳川氏季世の學問、盡くこの臭味を帯びたるもの、自ら其故なくひばあらず。皆川淇園、すでに名物に精しきを以て、京師に鳴り、村瀬栲亭、巖垣龍溪、亦た古注の大家と稱し、北山、朋齋、又出入先後するところあり。而して、錦城實に其最たり。但し、錦城の九經談、一世を震撼せし大著なりと雖も、要するに、最近清人の餘唾を甜りしものにして、舶載本乏しき當時に在りて、僅に珍と稱せられしに過ぎず。たとへば、今日の外國語に通ずるもの、往々にして、歐西大家の新説を摺撫し、自ら僭して創見となし、以て世を欺くが如きのみ。之を一概して、我が邦に於ける考證一派は、到底清人と争ふに足らざるを疑はず。

その特に大書すべきは、折衷考證が、學問の衰微を促がせしこと、是れなり。二派の學、公正の見地を以て成り、他の諸學派を研覈するの道を開き、從來固陋なる門戶の見を破り、學術上に一新紀元を劃せしと雖も、固より、自己思索の體系を確立するを得ず。加ふるに、その取舍の際は、自己を没却せざるべからず、然らざるものは、眞



の折衷に非ざればなり。かくの如くして、果して何物を折衷すべきかを知るに及ばず、その結果は、聯絡なき綜合に陥ることあり、故に論旨の模稜と立言の薄弱とは、愈に救ふべからざる疾なり。兼山、金峨の輩、一時の英豪たりと雖も、之を仁齋、徂徠に比すれば、氣局の大小、莫然として異なり。折衷すてに然り。考證は、徒に博渉を勉めて、故事を知るのみ。こゝに於てか、北山、錦城以後の學界は、沈靜に歸せざるを得ず、しかも是れ、覇府衰亡の兆、すてに顯はれし時にして、その間に有力なりし思想は、陽明學と水戸學とありしのみ。而して、氣運の政治上に實現せしものを、寛政異學の禁となす。その主とするところは、朱學の再興に在りと雖も、要は、自然の勢に外ならず。三博士と五異學の徒と、趨向固より同じからずと雖も、之を孰れにするも、早晚必ず避くべからざる終局の状態は、即ち是れのみ。後章之に就いて、詳説するところあるべし。

かくの如くして、折衷考證の學と異學の禁とは、學界を沈滯せしめ、之に代るものは、詩文の流行なり。こゝに於てか、その根本の理因は、全く異なりと雖も、之を表面より觀れば、化政の文物は、元祿の盛と頗る相似たり。山本北山は、謫園攻撃の有力

者にして、袁中郎を主奉し、李王を彈斥せり。市川寬齋、大窪詩佛、皆その門に出て、宋詩を唱へて、清新を勉む、而して、その變や、新に清詩を輸入せり。こゝに至りて、江村北海が、凡そ百五十年を後れ、百世と雖も知るべきなりといひしもの、愈よ中れるを覺ゆ。茶山、山陽より星巖に至るまで、皆然らざるはなし。而して、文は却つて三博士の手を待ち、亦た同一の傾向を表示し、清初名家を規撫するもの、その人、愈よ多く、詩人と同じく、文人なるもの、又別に學者以外に立てるあり、齋藤拙堂、野田笛浦、森田節齋の如き、皆然り。これ必ずしも分業の結果に非ずして、むしろ經術愈よ輕んぜられ、世を舉げて、詞章を重んぜしが故ならむのみ。



## 第十九章 調和學派

從來我が邦に弘布せし教義の最も主要なるもの、凡そ四種神儒釋老是れなり。他に耶蘇教あれども、今日なほ振はず。况んや天草亂後、國體に害あるものとして、排斥されし幕府の當時に於てをや。この四教相並びて行はれし間、自然の趨向として、之を調和せむと規畫せしもの數ば之あり。大抵二以上、或は盡く四者を兼ね、之を數理的に計算するも、その數明かなれども、中には旗幟鮮明ならざるものあり。その致察を値するものは、左の數者にして、就中儒教と緊密の關係あるものに就いて、その學者の略傳を附記せむ。

(一)儒佛 護法資治論の著者森儼塾、蓋し其人なり。儼塾名は尙謙、字は利涉、小字は龜之助、又不染居士と號す、攝津の人。少より學を好み、はじめ福住道祐に事へ、繼いて松永昌易に従ひ、二人咸な之を異とす。父某、醫を以て永井侯に事へ、攝津高槻に居る。その没するるとき、儼塾年二十六、遺言を以て其地を去り、京師江戸に遊學し、凡そ八年にして、業大に進む。この時に當つて、水戸の義公、廣く海内文學の士を辟

致し、國史を編修す。儼塾召されて之に赴き、局に入つて、その事に與る。儼塾臨能多く、醫術兵法擊劍、皆その要を得、釋典に至つては、尤も之を研究し、遂に如上の著あり。その友、安積澹泊、痛く之を斥け、數ば規練して曰く、速に之を火して禍を貽す勿れ、と。儼塾従はず。蓋し水戸學は、次に記する神儒の調和を事とし、佛と相容れざればならむ。之を外にして、僧徒中に於て、亦た其人なきに非ず。存道は二教合璧論五卷を著し、鬼神と生死とより立論して曰く、儒佛心源同じく、教跡異なり、其源を取れば混然同一、其跡を執れば千差紛亂、と。智脫は、儒教合論九卷を著し、その中に曰く、儒教跡を異にすと雖も、聖學の樞要は、心性の一理にあるのみと。又曰く、儒は心性を明にするものに非ず、身を修むるのみ、心性を明かにするは、佛に如かず。天下儒なければ、孔子の道廢れむ、孔子の道廢れば、身を修むるに由なし。天下佛なければ、佛師の道晦からむ、佛師の道晦ければ、心を明かにするに便なし、と。然れども、その多數は、佛教を辯護して、決して儒家の臆想する如きものに非ずとなし、之を排するものは、知らざるが爲なりといふを主とす。故を以て、論旨時に技梧を免れず、唯だ道脫二人の如きは、固より惡しからず。



(二)神儒 その源、頗る遠きに在り。菅原道真和魂漢才の語、すでに這般の消息を洩らせしものとして、不可なし。而して、その學説を立てしは、山崎闇齋を以て、嚆矢となす。他に藤樹、蕃山等の諸家、國體論に道及するときは、亦た自ら然るものありしこと、前に述べたるが如し。その後、松宮觀山に學派辨解あり。高松方孫に聖學指掌あり、帆足愚亭の入學新論、又之に及ぶ。その多數は、吾が國民精神を主とし、之に資するに儒を以てせむとす。たゞ愚亭は、兩教決して相戻らざるを辨じて曰く、神道以忠信爲宗、以明潔改過爲道、皆與孔子道無異と。然れども兩教の相違に就いて、又細微の辨を爲せり。高山仲繩、蒲生君平の輩、略ぼ相似たるものあり。水戸學派、亦た然り。弘道館記に曰く、奉神州之道、資西土之教と。藤田幽谷、同東湖會澤正志等、即ち是れなり。正志の著、新論あり、併せ觀るべく、後章更に詳論するところあるべし。

(三)神佛 これ儒學史上、直接の關係なけれども、便を以て、聊か附記するところあるらむ。この派、亦た上代に始まりしものにして、空海の本地垂迹の如き、その彰著なるものなり。幕府時代、又二三その人あり。墨舟の雲遊文蔚に曰く、二道互翼而不

相妨と。僧敏は神道異說辨を著し、公言して曰く、古來說神道、多以佛教補成、諸神佛各成一教と。この外、神道家にして、此説を主張せしもの、伊勢の人、龍尚舎あり。名は熙近、字は道且、その著には神國決疑篇あり、僧敏之を注す、實に前二人の陳吳たるべきものなり。

(四)孔老 本來の學者、黃老を究めしもの少し。幕府時代、盧草拙、林東溟、小川泰山、桑原空峒、金闕齋の如き、纔に其人のみ。而して、孔老調和を説きしもの、葛西因是あり。曰く、是與孔孟其揆一也、唯後儒拘泥文字、不能解其意、誤作異端耳と。因是、名は質、字は休文、通稱は健藏、その父は陸奥の人、因是大阪に生れて、江戸に長じ、平澤旭山に従つて、詞章を學び、林祭酒の門に入り、昌平齋に講員たり。遂に儒を以て自ら命じ、徒を延きて教授す。膳所濱田の二侯、招延して門客となし、之を待つこと、甚だ渥し。人と爲り、口辯あり、流滑能く人の頤を解く、居常經子を説くや、悉く舊説を捨て、必ず獨見を出す。間々牽強に涉ると雖も、所新奇警、頗る聽くべきものあり。その著、老子幅注、中庸辨錦、大學辨錦、莊子神解等あり。又喜んで詩文の法を談ず、人或は目して金聖嘆、林雲銘の流亞となす。その少き時、豪放酒を嗜み、氣を負ひ、辯論の際、



動もすれば、人を凌ぐ、中年大に改むるところありと雖も、酒間談熟するに至りては、その風、復た露はる。人或は之を以て因是を少とす。その作るところの詩文、一種の風格あり、世之を稱して異論なし。文政六年四月歿す、年六十。

(五)神儒佛 武田琴亭大和三教論を著し、その中に曰く、三教次序、始于神、中于儒、終于佛、三聖一德而異方、三教雖異、其化一也、と。琴亭の傳、詳かならず。加藤不爭、又聖學知律あり。

(六)儒釋道 之を彼に見るに、隋の世、文中子あり、その中説、周易篇に、三教於是可一といへり。之に次いで、白居易の三教論、衡劉謐の三教平心論、林兆思の三教會編、陶宗儀の輟耕錄等、皆之を言ふ。本邦に於ては、はじめに空海あり、三教皆歸に曰く、聖者、驅人教網三種、釋李孔是也、深淺雖有隔、並是聖道、若入一羅、何負忠孝、と。文保年間、五山の僧大龍あり、幕府時代には、無隱の心學典論あり、曰く、夫中華聖人之道三焉、曰孔子、曰老子、曰佛、孔子以儒術教天下者也、老子以虛無教天下者也、佛以諸方實相教天下者也、夫然後天下之教鼎足而立、聖人之道大備矣、と。桑原空峒、三教一致の著あり、空峒は元と書家なり、名は守雌、字は爲齋、別に方外閑人と號す。平安の人、父正員、醫

を業とす。空峒五歳にして、好んで字を書し、十二歳、筆札の美、貫紳の間に稱せらる。稟性孱弱、夙に隱逸の志あり。二十五にして、世事を謝し、自ら髡して、婚官せざるを示し、唯だ讀書を以て事となす。はじめ、合田晴軒に従つて、性理學を受け、業成りて、後教授し、餘暇益す筆札を研究し、歴代諸家の論説を博覽し、唐宋以後の墨池譜法、叢記を抄録すること、前後數百卷、又周秦漢魏より唐宋元明に至るまで、名人の眞跡、遺墨を臨摹すること、殆んど四十年。藏儲の富、比肩するものなし。故を以て、中年以後、字を請ふもの多く、儒名爲に掩はる。延享元年歿す、年七十二。

(七)神儒釋道 すてに、いづれか三教の調和を主張するもの、又自ら之に論及す、空海、大龍の如き、皆是れなり。

如上調和派の主とするところは、一主義を立つるよりは、むしろ、その撞着せざるを確證せむと欲するものなり。而して、その多數は、諸教の極致、いづれか善を爲せといふに非ざるものぞといふを以て言とす。然れども、予は、這般調和の、殆んど無意義なるを思ふこと、數ばなり。その結論、全く同じとするもの、必ずしも、之を均一にするを要せず。何となれば、議論の進程を考察せざるもの、斷じて、學問的ならざれ



ばなり。加ふるに、人情の常、唯だ同を擧げて、異を舍く。かくの如くして、差別を抹殺せむとするもの、比々として、皆是れ、學術研究の眞精神と背馳すること甚しく、その旗幟鮮明ならず、影響の決して多からざる、亦た怪しむに足らざるなり。

## 第二十章 寛政異學の禁と三博士

木下順庵の東下に次いで、曠世の逸才物徂徠を出したる江戸は、幕府の中葉百年間、殆んど海内文物の中心たるの觀あり。京洛の儒は、仁齋東涯より以下、寥々殆んど聞くなしと雖も、實は勢力蓄積の時期にして、寛政に至るや三博士を出して、學政の改革をなさしめ、その後、關左殆んど儒を出さず。循環の理、史上に觀るところ、常に此の如し。然り、關西に於ける隱然たる實力の存在は、その往々にして、時尚の先たるの一事に就いて、之を知るべし。竹内式部が公家と糾合して、變を資曆に企てしは、山縣大貳王政を夢想して、禍を明和に取りし先聲なり。折衷の學、井上金峨片山兼山に始まると雖も、木門の柳原篁洲が紀海に教授し、訓詁は馬鄭に取り、義理は程朱に取りしは、はるかに其前に在り。考證の學、錦城に至りて、大に稱せらると雖も、良野華陰が百家に出入したると、皆川淇園が獨造深詣とに比して、後ること甚し。龍草廬の書畫會、亦た江戸に盛に、江村北海の日本詩選、池桐孫五山堂詩話の藍本たり。その善といはず、惡といはず、西之が始をなし、東之を承くるは、幕府時代の常に



して、江戸の京都に於けるや、到底歴史的威化の一點に於て相及ばざるを示すものなり。一は澁水池をなすが如く、一は深山巖罅の泉、たとひ枯旱に遇ふも、滴瀝なほ絶えざるが如し。而して、浪華文物の興起は、關西文化中心點の遷徙を意味するものにして、その勢の尙ほ新なるを見るべきなり。

浪華の文學は、五井持軒を以て唱首となす。時を以てすれば、仁齋益軒と相若く、而して、懷徳書院、享保に建ち、三宅石菴、中井養菴、持軒の子蘭洲、相踵いて、教授す。木門の人あり、物氏の徒あり、極めて多様なり。その地は、東西交渉の要津に當り、四方財貨の集散するところにして、豪商大賈、坐して貨權を握る。たとへば、戰國時代に於ける堺の商賈が、武門以外の一大力たりしが如し。こゝに於て、富力を恃み、文藝を事とするもの、少からず。山片蟠桃が獨創の學を立てしも、この地なり、近代雜學者の泰斗たる木異齋の出でしも、此地なり、その鬱積の久しき、遂に三博士を養成せり。三博士とは、柴野栗山、尾藤二洲、古賀精里の三人にして、その片山北海の混沌社に在るや、諸子と交遊し、遂に異學禁制の學を東都に成すに至りしなりき。

柴野栗山、名は邦彦、通稱は彦輔、讚岐高松の人、はじめ浪華の後藤芝山に學び、後東

遊して、紫を林家に承く。英邁不群、經籍に耽思し、傍詩文を善くす、學成つて後、阿波侯に事へ、儒員となり、祿四百石を食み、京都に住して、宋學を唱ふ。西依成齋、赤松滄洲、皆川淇園と相善し。天明八年、五十三にして、幕府に召され、江都に來りて、昌平齋の教官となり、學政を定む。後、布衣班に進み、公子に侍讀し、大議ある毎に、謀詢少からず、文化四年歿す、年七十四。平生書を著すを欲せず、かつて頼春水に謂つて曰く、書を著すは人を益せむが爲なり、余の如き迂腐の儒、不急の書を作るは、人の心目を損するなり、故に余は書を著さず、これ人を益する所以、然らば之を著書ありといふ、亦た可なりと。故に栗山文集の外、著すところ多からずといふ。

尾藤二洲、名は孝肇、字は志尹、通稱良佐、伊豫川江村の人。父、操舟を業とす。二洲幼にして足疾あり、大阪に來り、學を片山北海に受け、復古學を講習す。この時、安藝の人頼春水、亦た社友たり、洛閩の書を得て、之を讀み、二洲に勸めて、之を讀ましむ。二洲甚だ悦び、以て正學となす。寛政中、召されて昌平齋の教官となり、俸二百石を給し、その足疾あるを以て、特に官舎を齋内に賜ひ、後、壹岐坂の第に就いて老を養はしむ。二洲人と爲り、恬淡簡易、文は歸震川を愛し、詩は陶柳を喜ぶ。文化十年歿す、



年六十九。靜寄軒文集、正學指掌、素養錄等なり。頼山陽素養錄を評して曰く、誠悟超詣、明の薛胡二氏の下に在らずと。

古賀精里、名は樸、字は淳風、彌助と稱し、世佐賀藩に仕ふ。少にして學を好み、日夕勉磨し、長じて王陽明の説を喜び、京師に遊ぶ、はじめ福井小車に従ひ、後西依成齋の門に入り、尋いで大阪に寓し、二洲春水と交り、朱學を奉ず。その國に還るや、擧げられて、機密に參預し、建設するところ少からず。後、故ありて、職を辭し、専ら教授を掌る。寛政三年、侯に従つて江戸に来るや、幕府命じて經を昌平黌に講せしむ。藩臣の黉に入りて、經を講ずる、精里より始まる、人皆以て榮となす。七年、擢んでられて、幕府の儒員となり、栗山・二洲等と學政を革む。すてにして、昌平黌の教官となり、文化八年、林祭酒とともに、對馬に赴き、韓使に接見す。晩年齒徳ともに高く、海内推して山斗となし、列侯贊を執るもの、少からず。精里人と爲り、軀幹豐偉、嚴密寡默、人不善あれば、直面之を戒しむ、而かも、退いて後言なし。深く性理を崇尚すれども、崎門固陋の弊を惡む、其學該博、發して詩文となる、文は周秦を祖述し、材を兩漢六朝に取る、故に其作峻潔にして、卓然家をなす。詩は李杜を宗とし、その味雋永、然れども、晩

年に及びては、晚唐宋初の格調を放出せり。又書法を善くす。文化十四年歿す、年六十八。文集初稿より三稿に至る、その他撰著少からず。

白河樂翁の寛政改革は、ひとり風俗制度に止まらずして、學政を整治するに就いて、大に意を致せり。林祭酒、岡田寒泉、皆之に任せしと雖も、實は三博士が、自己の學を標榜し、兼ねて弛慢の學風を一洗せむと欲せしものに外ならず。栗山最も此舉に銳意し、謗讟四起を避けず。五異學の徒、敢て之に屈せず。關西に於ては、その友赤松滄洲、大にその不可を論ぜしと雖も、終始之を贊助せしもの、西山拙齋、頼春水中井竹山あり。かくの如くして、宋學復た振興し、門戸を張るの風、全く其跡を絶らしと雖も、仁齋、徂徠の當時、辨難攻撃、刀戟相摩するの壯觀は、復た見るべからざるに至れり。

三博士以後、昌平黌殊に其盛を極め、述齋、岩村侯の子を以て、入つて林氏を嗣ぐや、英邁の資を以て、益すその規模を廣大にし、學政を更張したりと雖も、その科試は、専ら宋學を以て統率し、特に人各私選あるを沮まざることを、やゝ寛なるのみ。かくの如くして、經術の講習、自ら因循に流れ、官學大家を出さず、加ふるに、樂翁の革正、浮文



を戒しめ、實用を先とせしを以て、士子文儒を以て自ら稱するを屑とせず、皆大義に通ずるを以て足れりとなし、その腴を味ひ、その馘を啖ふもの、罕なり。これ經術の振はざる所以なり。たゞ三博士等、すでに崎門の固陋に鑑み、詞章を勸め、その自ら奉ずるところ、亦た正を失はざりしを以て、昌平黌の儒生、詩文に長ずるもの、少からず。山本北山、藝園を攻むるは、大に可なりしも、之に代ふるに、袁中郎を以てせしは、暴を以て暴に代ゆるもの、その徒に、寛齋詩佛あり、次いで海内詩壇の權を握りしも、文に至りては、三博士の餘香、長く存し、春水の子に、山陽あり、而して、齋藤拙堂、阪井虎山等出づ。

文政天保以後の經術、觀るに足らず。猪飼敬所、古學を奉じて、該博と稱せられ、東條一堂、朝川善庵、徵引博涉、皆考據の學なり。官儒には、古賀侗庵、佐藤一齋、安積良齋あり、皆その職に在るを以て、門戸を立てず、却つて文章を以て推さる。聖堂の學者には、松崎慊堂あり、洛閩を出て、漢魏に歸し、蔚然として、大家と稱せらる。その門下に、安井息軒、鹽谷岩陰、芳野金陵を出す。この三人、相繼いで、儒官に徵さる。息軒の經術、頗る博洽、慊堂、侗庵以後、稀に見るところ、その著、論語集說、左傳輯釋、管子纂詁

の如き、夙に海外に知らる、又兼ねて文辭に妙なり。岩陰に至りては、その文、簡鍊勁拔、遙かに前人を超越す。三人の中、岩陰ひとり早く死し、その他は、明治に入りて猶ほ存し、各後あり。而して、是を稱府官學の掉尾をなす。その他は、皆碌々、殆んど言ふに足らず。諸家の傳、一々述べず、餘白なきを以て、然るのみ、必ずしも、輕重の意あるに非ず、讀者之を諒せよ。



## 第二十一章 心學

二一八

幕府時代、四民の別を設くる、太だ嚴。なほ印度古代の族制の如く、劃然として相分れ、かつて混亂したることなし。三百年の文化は、主として、士人の間に行はれし觀ありと雖も、實は然らず。一般平民は、別に分れて特殊の人文を發達し、その末に於ては、決して劣らざるものあり。而かも、今日その價值を論ずるもの少き所以、なほ往日尊卑の觀念を擺脫する能はざるに由るや必せり。試に見よ、能樂謠曲は、室町の頃より續いて、公武の間に喝采を博せしが、之に對する淨瑠璃、操芝居は、町人の間に行はれ、殊に河東新内等、幾多俗曲の勃興に至りては、その盛、殆んど極まり。之に次いで、狩野一流の唐畫、土佐の倭畫及び南宋の文人畫は、上流社會の鑑賞を得たるに對して、又平より以下、菱川烏居の浮世繪は、平民の愛玩するところとなれり。翻つて、文學に就いて之を謂ふも、三十一字の和歌は、依然として貴族文學たるの光榮を荷ふに對し、十七字の俳句は、平民文學として標置せられ、芭蕉其角の尊崇されしことは、和歌三神も却つて及ばず。後には、猶ほ變じて、一層自由にして檢束なき

川柳となり、最も汎く下層社會に流行したりき。夫れ諸般の學藝技術、皆雅俗官民の別を設くること、此の如く、教義亦た何ぞ獨り然らざらむや。謂ゆる儒學は、玉侯士人の學として、政治倫理の原則を探究するを以て其旨となせしに對し、こゝに俗流の中に興りて、實踐道德を鼓吹したるものあり、これを心學となす。

平民的道德教たる心學の勃興は、自然の趨勢なりと雖も、腐敗せる儒學の反動として、その流布、頗る目ざましきものありき。蓋し徠門の學、大に行はれしは、元祿奢靡の日に於てし、その後、篤學慎行、節義を重んずるの士なく、社會は浮華輕薄の風に滿ち、時運の轉換、道般教義の必要を感せしこと淺からず。然れども、又考ふるに、當時特に之を心學に求めし所以、社會教育、未だ足らざるが故にして、彼等は、あるが上にも、卑近なるを望みしなり。試に當時平民教育の概況を述べむに、中には俊秀なるもの、稀に進んで、高尚なる學問を修めて、名を成すものあれども、そは全く例外にして、伊藤仁齋等、二三の人に於て然るのみ。一般より言へば、數年間、謂ゆる寺子屋に學びて、能事畢れりとなす。この寺小屋は、一に手習師匠と呼び、主として習字を授け、讀書算數の一端に及ぶに過ぎず、その監理管督の不始末は、更にも言はず、教授



法又決して其當を得ず。その授くるところは極めて卑淺にして、教科書と名づくべきものは「國盡」消息往來「商買往來」の如きものを主とし、その絶頂を極めしところ、僅に孝經小學に及びやがて全科卒業となれば、退いて毎日の業務に従事せざるべからず。之に加ふるに當時の普通教育の上に於て、大なる障礙を與へしは、町家の風にして、その貧富を問はず、苟くも男子にして、年の頃十歳にもならば、必ず年季奉公に出し、女子は専ら三絃・踊等の遊藝を習はしむ。かくの如くなれば、往々中途にして寺子屋をも退かざるべからず。その後は、一生物價を配する外、筆を執ることなく、出納の帳簿を繕く外、書物らしきものを見ることなく、草雙紙・浮世本を讀むは、彼等の中にて、最も趣味を解するもの、事なり。今夫れ、普通教育の進まざるものは、精神的快樂を知らず、職工商買の輩、家業の暇には、日待月待の淨瑠璃踊の寄せ會を催し、娘子供の藝能衣裝の品評に餘念なきのみ。こゝに於てか、芝居操人形は盛に行はれ、鄭聲の淫に似たる豊後節は、一般に歡迎せられたり。且つや、昇平日すでに久しく、士民の游惰と奢侈とは、年を逐うて愈よ甚しく、淳朴の風、全く棄てられ、人心輕薄に流れて、その底止するところを知らず、寛政の時、白河樂翁の政務に參す

るや、主として、節儉の令を下し、文武を獎勵せしこと、まことに其故なきに非ざるなり。この間、唯一の教義として、人心に慰藉を與ふべき佛教も、強奪の餘勢、甚だ振はず。僧侶は、腐敗して、漸く腥く、進んで弘教を勉むるものなく、信徒は、唯だ形式的に父祖の宗旨を奉守するのみ。法談念佛講のごとき、多少益なきに非ざれども、若い者には、齒ごたへなし。かの豪宕不羈の奇僧志道軒が、豹變して後、はじめて開きし軍談講釋は、よく彼等の耳に入りたるものなれども、見るべき結果なく、その目的は、全く娛樂に在りき。この時に方り、諄々として通俗を主とし、倫常を説くものあらば、その益するところ、固より鮮少ならず。心學は、實に這般の目的を以て、起れるもの、その言語の簡易にして、例證の卑近なる、たとへば豚肉の如く、之を嚼むに硬からず、味美にして、而かも多少滋養ともなり得べきが如し。要するに、心學教理は、朝府時代下層人民が唯一の精神的糧食たりしものなり。心學の研究、予輩豈に偶爾ならむや。

心學創立の祖を、石田梅巖となす、名は興長、通稱は勘平、丹波桑田郡東縣村の人、貞享二年を以て生る。人と爲り、方正にして、才氣衆に超えたり、父を淨心といひ、性質



直にして、能く之に教へたりといふ。梅巖年二十三、父母死して後、京都に出て、商家に事へ、暇あれば、神道を學ぶ、常に以爲へらく、神道は、我が邦先王の遺教にして、神典は、歴史なり、政令なり、願はくは、この貴ぶべく重んずべき國家特有の大道を、民衆に知らしめむと。仍つて、ひたすら研鑽し、孜孜として倦まず、然れども、その主に事ふるや、毫も商務を忽にせず、常に云ふ、若し我が説かむとする道を聴くものあらば、毎戸に就いて之に教へむ、今は唯だ閑なきのみと。又云へらく、われ聖賢の言行を規矩として、之を今日に勉め、吾亦た以て人の法則たらむと。三十五歳の頃より、了雲禪師を師として學び、刻苦精勵、大に工夫を凝らし、四十二三歳の時、主家を辭し、兼ねて諸家の講筵に侍し、神道を主とし、王陽明の説、老莊の學、さては佛教を參酌し、遂に自性見獨を發明して、一家の學を爲せり。こゝに於てか、知るべし、心學は、神儒佛老の四教を調和したる一種の道德教なるを。享保十四年、四十五歳の時、京都車屋通御池上る所、東側に住居し、はじめ、講席を開き、又諸方に招かれて、心學を説けり。その門に榜して云ふ、

何月何日開講、錢入り不申候、無縁にても、御望の方は、無御遠慮、御通り御聞可被成

候。

これより後、毎に此榜を懸けて、開講したりといふ。その聽衆の席は、男女の別を設け、女子の居るところには、隔ての籬を懸けたり。梅巖の著はすところ、都鄙問答、齊家論あり。甲は平生門人の質疑に答へし語類を集めしものにして、元文四年、乙は延享元年を以て梓行せり。この年九月歿す、年六十。洛東烏邊山に葬る。梅巖の篤實謹慎なるや、俗人を教化すること、頗る懇切にして、大に世の尊敬を得たり。因つて後世心學の祖として、崇められ、その學を爲すもの、皆石門と稱す。

梅巖の説に因れば、學問は自己の本心、即ち天命の性、換言すれば、天地人三才の本體を知ることにして、之を領得して、身に行ふを徳といふ。彼が這般の原理は、之を王陽明と佛とに得たるものなり。性は神明仁慈、之を己の心に得たるるとき、父母には孝順を致し、他人には信實を盡すべし。そも天照大神は、神璽寶鏡寶劔三種の神器を以て、其徳を顯はし、畢竟天道その者に外ならず。故を以て、歴世この徳を離れず、臣下億兆亦た之を體して行へば、倫常能く行はれ、家齊へ國治まるや必せり。彼は、先天良心論者にして、兼ねて明晰なる國家主義を抱きしものなり。



梅巖の高弟に六角街の人、近江屋仁兵衛といふものあり、隠居して、全門といひ、師の後を嗣いで講説せしが、その徒なほ多からず。手島塔菴に至りて、大に之を振興し、その學はじめて盛なり。

塔菴は、京都富小路三條街の商估なり、家號を近江屋といひ、源右衛門と稱せしが、隠居の後、嘉右衛門と改む、名は信、一名は喬房、字は應元、平安の東郭華頂山下に庵を結て、因つて東郭と號し、又塔菴と號す。後、居を朝倉街に移す。人と爲り、敦厚淳朴少より梅巖に就いて心法を學び、その蘊奧を究め、師の没後、五樂舎を建て、講席となし、日夜之に臨んで教授す。家資饒豊、門徒行ふところの束脩、金錢財物の如きは、却けて受けず、又門徒請ふことあれば、直に往いて講説し、専ら寛厚溫順の風を以て人を教化し、諄諄として數萬言を累ね、訓導倦むことなく、四方の民、喜んで教を受け終に其學をして、海内に擴からしむ。社約數條、載せて史料叢書に在り、今左に其一を擧ぐ。

各本心は御發明之通にて、唯上を敬ひ下を憐み、主君へは忠義を盡し、父母へは孝養を致し、夫婦は睦しく、兄弟は中能く、召仕ふ人は、子に思ひ比べて、信實の慈愛厚

く、恵み有て、天命の家職を忘れず、勤むる外なし。如此申せば、事多き様なれども、先第一御主人様へ忠節を御盡し、御奉公を大事になされ、御兩親様方へは、機嫌よく、御孝行に御事へ被成、何れも御心の安堵し被成候様にと思召候はゞ、自然御家業も大切に被成候故、御繁榮にて、御身體持も宜敷成候道理に候。左候へば、世間の人も、目を付居候、衆中は、天然と感心致され、道をも學ぶ志も出申べく候。然れば、一人にても、道に入られ候へば、故、石田先生の御本懐にも、少々は相合ひ可申奉存候まゝ、故先生への御報禮と思召、御社中様方、御示合被下候て、御主人様御兩親様への御事へ、御出精被下候様、偏に奉希候、右御頼申上度、如此御座候以上。

安永九庚子八月

手島塔菴

天明六年二月歿す、年六十九。著すところ、假名書きのもの、甚だ多く、皆通俗を主とせり。「男兒女兒に示す前訓」は、幼童に誨ふる小學にして、「我が杖」町人身ならしは、工商子弟が身を修め、家を保つての便となすべし。「爲學玉帶」目の前「有べか」朝倉新話「安樂問辨」の如き、皆心の本體を説いて、私慾を去り、天理の自然に就かしめむとす、而して此等の書は、或は篤志の者に示すが爲に、自ら筆を執り、或は門人その講義



を筆記せしものなり。塔菴、資性恭謙にして人に下り、且つ慈愛、善く衆を導きしを以て、海内その名を知らざるものなく、牧童樵夫に至るまで、翕然として歸向し、呼んで手島先生といひ、或は推尊して聖人と爲せり。かつて大和に赴きしとき、途に竹輿を齎らして強いて乗らしめ、平素教導の恩に酬むむといひしものあり。その死するや、葬に會するもの、千を以て數へ、その居より、黒谷に至るまで、二十餘町、道路爲に狭く、近世稀に見るところなりきといふ。塔菴の子に上河正揚あり、淇水と號し、石門三世と稱し、父に繼いて教授せり。

これまでの心學は、主として京坂地方に行はれしが、之を關東に弘め、一層盛ならしめしものは、塔菴の門人中澤道二の功に歸せざるべからず。道二、名は義通、俗稱を龜屋久兵衛といふ、京都上京新町の人、享保十年を以て生る、その家、世々織紐を業とし、はじめ法華教を奉ぜり。かつて鬼子母神に詣て、香火を供するもの、市の如きを見て、心に開へらく、神は金石の偶像に過ぎず、而かも騰つて應ずるあるは、豈に人心に得るところなからむやと。家固より貧賤にして、讀書の餘暇なく、且つ文字に疎けれども、儒佛の教を喜び、寸隙を竊みて、講釋法談の席に連り、又宿儒高僧に問

ひ、稍や發明するところあり、たゞ妙法の二字に至りては、猶ほ疑團なき能はず、未だ自得するところあらざりき。一日早起、門を掃ふ、數僧相語つて過ぐるものあり、その何處に之くかを問へば、東嶺禪師の説法を聴かむが爲なりといふ。道二大に喜び、箒を投じて起ち、直に西山に抵る、聽衆すてに堂に盈つ。時は霜曉、寒威頗る劇、人皆畏懼の色あり。すてにして、禪師壇に登り、法を説き、未だ半ならず、大喝して曰く、寒を畏るゝものは、須く俗に歸るべし、禪を學ぶを爲すこと莫れ、盍ぞ各之を其心に求めざる。魚は水に在つて、水あるを知らず、人は妙法の裡に在つて、妙法を知らずと。道二瑟縮して、末席に在り。之を聴くに及び、豁然大悟して、開へらく、萬言の妙法、吾が心に外ならず、即身成佛、即ち是れなりと。時に年四十一。仍つて又石門の教を奉じ、牛島塔菴に親炙し、遂に性理の濫輿を究め、三教一致の旨を明にす。五十五歳剃髮し、はじめて道二と稱し、塔菴の許可を受け、江戸に來り、茅場町なる醫師前田一貫の宅に寓して、講席を開き、後、鹽町なる炭屋某の宅に寓し、毎夜開席して、心學道話を講説し、諸士大夫より庶民商工に至るまで、大に之を信じ、社友日に多く、月に盛なり。後、講堂を小川町に建てしが、寛政三年に至り、外神田相生町に參前舎を設



立し、會日を定めて講談す。こゝに於て、道二の芳名、都下に普ねく、出藍の譽、愈よ高し。すてにして、京都に歸り、攝陽南紀に至り、兩丹播但の諸州に赴き、或は東海北國に往き、到る處、道を説き、務めて俚解をなし、雜ゆるに滑稽諧謔を以てし、能く人をして感激して心服せしむ。三都ともにその學館を開き、皆某某舎といひ、京都には、特に四五所を設く。享和三年、江戸の參前舎に歿す、年七十九、本所猿江妙壽寺に葬り、法號を貞徳院法玄道二居士といふ。道二の講話を筆記したるもの、道二翁道話六編あり、梓行して世に行はる。

道二の學は、梅巖塔菴より出て、更に一步を進め、専ら心性の考察に入れり。以爲へらく、天地萬物は、皆同根同性、各自の心、亦た無我平等にして、その形態は、異なるも、その本質に至つては、高下の別なし。故に人はその形態に順應して、和合を保續せざるべからず、これ即ち善なりと。こゝに於てか、其說愈よ陸王に近く、更に又、張橫渠に似たるところあり。その差別は、行爲上に存し、心靈に至りては、無差別なり、かくの如くして、宗教的分子を含有し、自然主義に趨向するに至れり。

道二の歿後、門弟植松自謙、繼いで參前舎に主たり。自謙名は徳恭、もと信濃の農家に生る、年長じて江戸に來り、赤坂田町に住し、出雲屋和助と稱し、貸本を業とせり、その道二の講を聴くや、風雨寒暑未だ嘗て怠ることあらず、道を信ずること極めて篤く、且つ性質朴、粹實溫良の人なり。その講席に列するや、茶を煎じ、炭を添へ、自ら僕役を執り、周旋して倦むことなく、人呼んで和助菩薩といふ。老後その郷に赴き、滯留中、病んで歿す。自謙は最も善く、心學者の人物を表彰せしものにして、下に錄する逸話の如き、又價值あり。かつて隣家より火を失し、財物盡く蕩盡す、人々爲に嘆惜して、措かず。自謙ひとり喜んで曰く、幸に俗累を脱し、吾が心はじめて安しと。因つて復た家屋を營まず、人に寄食し、常に稚子と伍し、教戒を遊戲に寓し、その己に懐くを樂とす。人或はその言語朴拙なるを以て、嘲つて没字漢となし、その學あり徳あるを知らざりしといふ。

心學の大家は、石田、手島、中澤の三子に過ぎず。梅巖之を創始し、塔菴之を大成し、道二之を弘布せしめたり。その外、石門の流を汲みて、道話をなすもの、數へ來れば少からず。その中、最も名あるもの、二三を擧ぐれば、松翁、鳩翁の二人あり。松翁、通稱は布施、伴右衛門、名を矩道といふ、京都松原の邊に住居し、學を塔菴に受け、後徒を



聚めて講筵を開く、著すところ松翁道話あり。鳩翁通稱は柴田謙藏、名は葦、字は陽方、薩埵徳軒に従つて學び、中年明を失したる後、専ら諸方に遊歴して、心學道話をなす。謂ゆる目に盲して心に盲せざるもの、名望頗る隆、諸侯之を招き、賤民之を慕ふ。天保十年歿す。男武修、その講話を筆記し、題して鳩翁道話といふ。二人の外、著書を以て知られしもの、奥田壽太あり、名は在中、頼杖と號す、安藝の人、堵菴の子、洪水に親炙し、天保十年、江戸に來り、參前舎に開講す、著すところ心學道の話あり。又女流の心學者としては、藤茂尼あり。

凡そ心學者の講說方法は、自ら一定の典型あり、はじめに古經中の一兩句を引き來り、敷衍擴張、例を引き、證を連ね、滔々數萬言、堅論横説、控送自在、たとへば麻姑を倩らうて、痒を搔くが如く、或は諧謔を交へ、人をして聞いて笑ひ、笑つて掌を拍ち、毫も倦厭の念を生ぜしめず、喋々然として、知らず、識らず、其道に入り、遂に正に復歸せしむ。之を高言莊語せずして、溫説篤論し、道理に照すよりも、むしろ感情に訴へ、欣然領得せしむるを以て、特色となす。唯だ、末流の輩、或は之を以て媚を凡衆に求め、軍談講釋と相去ること遠からず、遂に衰運に臨むの止むを得ざるに至れり。然れども是

れ、其人を得ざるが故にして、決して其學の罪に非ず、之を以て誚譏するは非なりと謂はざるべからず。

心學の下層社會に於けるや、その効果、固より大にして、且つ實例に乏しからず。今試に二三を挙げむか。近世畸人傳、堵菴を傳するの條に曰く、或る婢女、郷里に祖母一人あり、貧にして親族の養を受く。知るもの、勸めて、その身得るところの金を分ちて、養を助けよといふに、婢肯かず、吾が身、親族の手を借らず、自ら衣食するは、猶ほ父母の幸なり、その上に、何の奉養をかいはむと。然るに、いつの頃よりか、その仕ふるところの家婦に従ひて、堵菴の講を聞きしより、前の言を悔みて、敢ば祖母に物を贈り、孝の心をはこびしとなり。又或る女、鼠の爲に衣裳を噛まれて、はらたち悲みしが、かねて彼の心法を聞きしは、こゝぞと思ひて、一夜靜坐して省るところあり、自ら悦んで、口ずさむ。けふまでは、鼠が喰ふたと、おもひしに、わたしが喰たと、おもやをかしいといへり。凡そ教示の旨、自らを抑へて、他を恵み、庶人の分を守りて、希望を絶つべし、儉を務めて吝なることなかれとなりと。橘南谿の北窓瑣談にも、之を記して、下の言あるを見る。曰く、婦人小兒などの耳にも入り易く、説き聞かせて、



孝佛忠信の事より、家業商買家産儉約、農業耕作の事に至るまで、手近く教ゆる故に、是にて、中惡き家内も、此講を聞きしより、家風むつましくなり、わんぱくなりし小兒も、父母を尊敬することを知りて、手習を精出すやうになり、酒興に耽りし手代も、俄かに篤實謹厚の行になりしこと、余常に甚だ多く聞き及べり。但だその高弟に教ゆるには、禪學の頓悟に似たることありて、少し奇癖の筋にも入るにや。只だ一通りの講釋は、平穩正當にて、大に世教を助け人間に益ある學なりと。

隈山谷將軍のものし玉へる内部文明論序中の語、又偶々此に及ぶものあり。曰く、余かつて笈を負うて江都に遊び、一日兩三友と酔に乗じて、麴街を歩し、心學道話の標牌を見る、乃ち笑つて曰く、咄、何者の猪奴、敢て愚人を瞞せむと欲するか、試に聽いて、以て一場の笑に堪らむと。遂に相率ゐて、入り、跌座目を張り、傍に人なきが若し。すてにして、講師壇に上り、先づ孝經の一章を講じ、繼いで之を證するに忠孝節義の事を以てし、丁寧反覆、交ゆるに眩暈を以てし、而かも、論理秩然、盡く正道に歸す、粗暴余の如きものと雖も、刻心銘骨、酒氣頓に醒め、同行皆泣く、と。因に言ふ、内部文明論は、川尻寶岑の著すところ、寶岑は、現存せる心學者中の翹楚といふ。但し今講

席を開かず。他の諸舎、十數年前、なほ京都に存するものありしと雖も、今やその存否を知らず。ひそかに思ふに、刻下の世、一時の文物昌盛を極むと雖も、ひとり下民社會の教育、殊に精神的の修養、至りて之を往日に比して、決して進歩したりとなさず。かの寄席は、彼等に對する唯一の娛樂場なれども、猥褻卑陋、仍ほ甚しきものあり。手はこゝに心學の復活と改良を以て之を救濟するの、頗る便益なるを臆想すること亦た數ばあり、而して、世幸に其人ありや否や。



## 第二十二章 二宮尊徳

二三四

尊徳翁の事、小學修身書類に散見し、五尺の童子、なほ之を識る。彼は徳行の君子たると同時に、功利主義の上に立ち、經濟道德の關係を明かにせし、穩健偉大なる平民教の開祖として、不朽の榮譽を値するものなり。

尊徳通稱は金次郎、相模足柄上郡柏山村の人、父は利右衛門、母は川窪氏の女、天明七年を以て生る。五歳の時、酒匂川洪水あり、損害數十村に及び、其家の田畝、害を蒙ること、最も甚しく、家産殆んど蕩盡す、利右衛門、夙に興業、夜に寝ね、その回復に従事せしが、不幸にして、病に罹り、在籍數周星、尊徳十四歳の時に没し、後二年、母も亦た逝く。この歳六月、酒匂川再び洪水あり、田畝盡く流亡す。こゝに於て、尊徳二弟を母の生家に托し、自ら伯父萬兵衛の家に寄食し、日夜農を務め、且つ幼にして貧困に陥れるを以て、深く感ずるところあり、慨然として聞へらく、天下憐れむべきものは、唯だ貧困のみ、吾若し家を興すを得ば、博く貧民を救助する法を講せむと。因つて天地神明に誓ひ、須臾も忘るゝことなし。幼時山に樵し、その途次、大學の書を、懐にし

て之を讀み、往々にして、高聲人を驚かす、或は目して狂見となす者あり。又十四歳の時、隣村の觀音堂に賽し、堂下に坐して深く念ふところあり、忽然として、一行脚僧來り、堂前に踞して經を誦す、その聲微妙、その經、深理廣大、一聞了然として、意中歡喜に堪へず。誦經すてに畢る。尊徳隨んで僧に問うて曰く、今誦するところは、何の經ぞ。僧曰く、觀音經なり。曰く、予かつて屢ば之を聴く、而して、今聞くところに異なり、何ぞ余が心に徹することの明かなるや。應へて曰く、世の誦するところは、吳音なり、今國音を以て轉讀せり、是れ子の解する所以かと。尊徳懐中を探り、錢二百を奉じて曰く、願はくは、寸志を呈せむ、再び誦讀せよと。僧その志を感じ、轉讀前如く、讀み畢つて、之くところを知らず。尊徳胸中豁然として、大に喜び、柏山村の善築寺に至り、和尚に謁して曰く、大なるかな、觀音經の功德、その理廣大無量、その意云々と。之を説解すること、流水の如し。和尚大に驚いて、曰く、予すでに耳順を超えたり、多年この經を誦すること、幾百千遍、未だその深理を解する能はず、今予少年一たび讀誦を聽いて、無量の深理を明解す、嗚呼、是れ菩薩の再來か。今野僧この寺を退くべし、願はくは、僧となり、衆生の爲に此寺に住し、大に濟度の道を行へと。尊徳



固辭して曰く、これ予の望むところに非ず、予祖先の家を起し、その靈を安ぜむとす、志ざすところ、出家に在らずと。これより後、佛意も亦た諸人を濟ふの功大なるを、知れりといふ。

尊徳の萬兵衛に寓するや、河邊の磧地を視、油菜を種ゑて、實若干を得たり、乃ち之を市場に鬻いて、膏油に換へ、晝は業を務め、夜は繩を縛ひ、鞋を造り、夜半人寝ぬるに至れば、晝を讀み、算術を學ぶ。萬兵衛、窃に之を窺ひ知り、叱責して曰く、汝之を學びて、何の用をかなす、且つ夜寝ねざれば、明日身躰疲勞し、必ず業を懈るに至らむと。尊徳、憮然として自失し、謝して之を止め、その後、暇あれば、一意鞋を造り、之を錢に換へて、貧民に惠與す。五六月の交、庭外不種の地を耕し、藥苗を拾うて、之を播き、轉転培養して、稔一苞餘を得たり。尊徳以爲へらく、これ天の賜なり、凡そ物を積み、大を致すは、必然の理なり、故に致々として懈らざれば、庶幾くは、以て家を興すの資と爲すべしと。これ他日報徳方法の由つて起りし所以なり。

明年春、萬兵衛の家を辭して、小田原に至り、士人服部氏の家三男ありて、皆讀書を好むと聞き、請うて、その家僕となり、夜は其側に侍坐し、傍聽して倦まず、遂に四書に通じて、之を暗記せり。又請うて三子通學の僕となり、學校に至る毎に、講堂の窓下に立ち、竊に講義を聽きて、略ぼ文義に通ずるを得たり。その後、服部氏を辭して、家に歸り、専ら産業に従事し、家を興すに汲々たり。且つ務めて、貧民を救助す、未だ幾ならずして、服部氏、禍患交も至り、家道甚だ艱く、而かも、之を整理する能はず、乃ち尊徳を請ふ。こゝに於て、復た服部氏に至り、日夜拮据すること、前年の如く、數歳を経て、盡く債を償ひ、更に餘財を生ずるに至れり。尊徳又數ば藩の重臣に就き、本藩領收升を改正せむを請ひ、その事行はれ、領民大に悦ぶ。すでにして、服部氏を辭し、その家を回復せむとし、孜々汲々、遂に初志を達するを得たり。文化元年、藩主金帛を賜うて、之を褒す。

これより先、小田原侯の分家宇津氏の采地、下野芳賀郡物井村に在り、土地瘠薄、之に加ふるに、天明の飢饉に遇ひ、戸口減少して、田畝荒廢し、年貢も亦た随つて減却せり。本藩之を憂ひ、屢ば金を出して、之を救へども、及ばず。こゝに於て、侯、尊徳を擧げ、之に委するに、分家興復の事を以てす。尊徳再三固辭し、然る後、命を奉ず。文政四年、その地に至るや、建議して曰く、荒を開き、發を興すや、固より易からず。若し必



ず之を爲さむと欲せば、皇國開闢の大道に由らざるべからず。從來常に賜金あり、故を以て、人皆心を奪はれ、詐欺百出、却つて弊あり。顧るに、鴻荒の世、開闢の時、金を海外に借るの事なし、故に皇國は皇國の力を以て國を治むべし、かくの如くして、功の成らざる、臣之を信ずる能はずと。侯大に喜び、文政五年、尊徳を擢んで、藩士となし、托するに、興復の事を以てし、十年間、その爲すに任かす。こゝに於て、尊徳盡く、田宅を鬻ぎ、奮然志を決して、再び故郷に還らず、家族を携へて、物井村に移居せり、時に文政六年なり。

これより、尊徳は、その自得に係る開拓法を實施し、舉直獎勵法、無利子金、旋回貸附法、報徳日課全法等を行ひ、大に徳化を敷き、數年ならずして、功績大に擧がり、名聲四方に噪しく、烏山侯、谷田部侯、小田原侯等、競うて、之に托し、皆効果あり。天保十三年、幕府に擢用せられ、普請役の格に班し、印幡沼開鑿の事を命ぜらる。尊徳乃ち意見書二卷を呈せしが、議論常に異なるを以て、用ひられず。弘化元年、日光神領荒蕪開拓調査方を命ぜらる。これより先、中村侯、相馬氏、藩士數人を擇び、尊徳に就いて、教を受けしめ、尊徳因つて、爲政鑑三卷を著はす、蓋し當時の諸侯、往々之を行ふものあり。

れども、その之を信ずる厚うして、その功の大なる、相馬領を以て第一となす。尊徳日光に至り、實地を検し、富國方法書六十卷を著して、之を上る。嘉永七年、日光神領九十村荒蕪開拓の命を受くるや、今市驛の官舎に移り、日光奉行に屬して、其法を施行す、不幸にして、疾に罹り、安政三年歿す、年七十一。

尊徳は、近世稀に見るの偉人にして、その學、全く自得に係る。蓋し天廩の才なり。その説、經濟道德の關係を主とし、精緻なる數理的統計を以て證となすが故に、基礎頗る固く、小にしては家を齊ふべく、大にしては國を治むべし。その學の精神、管仲等、法家と相似て、而かも寛厚、徳化を重んずるの風、最も稱すべし。後世その學を稱して、報徳學といふ。報徳外記、報徳第二十五に曰く、我が道、徳に報ずるに在り、何をか徳に報ずといふ、三才の徳に報ずるなり。何をか三才の徳に報ずといふ、日月運行、四時循環、萬物を生滅して、息むなきものは、天の徳なり、草木百穀生じ、禽獸魚鼈殖し、人をして生を養はしむるものは、地の徳なり、神聖人道を設け、王侯天下を治め、大夫士邦家を術り、農は稼穡を勤め、工は宮室を造り、商は有無を通じ、以て人生を安ずるは人の徳なり、嗚呼三才の徳、亦た大ならずや。夫れ人の世に在るや、三才の徳に



頼らざるものなし、故に我が道、その徳に報ずるを以て本となすなり。上は王侯より、下は庶人に至るまで、各天分により、節度を立て、儉勤を守り、而して、分外の財を譲つて、報徳の資となし、以て負債を償ひ、以て貧窮を恤み、以て衰邑を擧げ、以て廢國を起す、その之を施すや、一家より二家に及び、一邑より二邑に及び、漸次郡國天下に及び、遂に海外萬國に推及す、これ天地人三才の大徳に報ゆる所以なりと。

報徳學に關する書籍、極めて多し。上に述べし爲政鑑富國方法書は、今觀るべからずと雖も、門人富山高慶、報徳記八卷、報徳論一卷あり、福住正兄、二宮翁夜話五卷、報徳學内記一卷、二宮尊徳翁略傳あり、齋藤高行、報徳外記二卷、二宮先生語類四卷あり、報徳記、最も汎く世に行はる。然れども、誤謬少からず、報徳外記及び語類の二書は、日本倫理彙編中に收む。篤學の士は就いて觀るべし。なほ寫本にして存するもの、頗る多く、幸田露伴氏の調査に依れば、左記の十數種、最も價值あるものといふ。

- (一) 二宮先生御説得聞書略
- (二) 天徳無盡現量鏡
- (三) 相州大住郡伊勢原村宗兵衛狀

- (四) 二宮先生文纂
- (五) 觀通悟道傳
- (六) 成田村小源治に遣はされ候書
- (七) 報徳教訓
- (八) 相州曾比村頂戴金請書寫
- (九) 福住佐兵衛宅に於て御話の記
- (一〇) 報徳寄せ書拾ヶ條
- (一一) 宮原治兵衛等に遣はされ候書
- (一二) 曾比村索繩御趣法帳跋
- (一三) 窪田先生御説經聞書
- (一四) 二宮先生御歌集
- (一五) 利根川分水堀割御普請見込帳



## 第二十三章 水戸學の消長

關左の風氣古しへより豪健と稱す、日高見の國に蝦夷人種の聚散せし當初は、姑らく之を措き、八州の野は、土豪の割居するところにして、四塞の固天下に敵すと稱せられ、鎌倉幕府の創立は、實に之を證明したり。金澤文庫、足利學校は、この土にも文化の餘光を被らしめしも、居然として、關東的なるを失はず。源實朝の金槐集、太田道灌の慕景集の如き、到底武人の文學にして、纖美軟弱以て習とせる三十一字中に在りては、たしかに異色を推す。而して、這般の風氣は、徳川氏の世に至りて、猶ほ儼存し、豪健の氣は、市井の俠者を輩出せしむるに至りて、愈よ彰著なりき。

水戸の地たるや、關東の邊隅に位し、提封三十萬石、之を紀尾二藩に比すれば、固より其半に及ばざれども、奥羽諸侯を牽制するの要衝に當り、幕府が之を股肱とせしもの、亦た宜なり。而して、この地の文學、一種の特色あり、然る所以は、義公の修史に本づき、京洛の儒を招集し、その思想は、風土の感化を受け、一層明晰となりしが故のみ。

水滸修史の由來、之を括言すれば、林家の本朝通鑑、日本の始祖を以て吳の太伯の胤となせしに憤激せしものなり。これを詳述すれば、頗る頗る興趣あれども、今姑らく省略に従ふ。而して、義公が、彰考館を開き、學者を招聘せしは、實に寛文十二年なり。この際、特に注意すべきは、その聘に應ぜし學者の多數は、京儒にして、而かも閩齋派中の人たりしこと、是れなり。この徒の學術、各異なりと雖も、京儒として、共通の思想を有せしは、斷じて争ふべからず。詳言すれば、家光以後、關東の威權、愈よ盛にして、殆んど皇室を壓せむとするを見、覇府に對し、一種不快の念を抱きしこと、是れのみ。崎門の淺見綱齋、三宅尙齋及び藤門の并河天民の如き、好個の代表者なり。こゝに於て、彼等の多數は、處士を以て自ら居り、祿仕を求めず、翻つて義公の名聲を開き、彰考館に入れりき。安積澹泊が、義公の創めて、肥傳を爲る、關西の英髦、府下に成集すといひしもの、即ち其證となすべし。史館のはじめて開きしとき、其員に備りしもの、辻了的實に京師の人、人見懋齋、中村篁溪、亦た其地の貫屬なり。その他、田止郎、佐々宗淳、青野叔元、大串元善、栗山潜鋒、三宅觀瀾等皆然り。潜鋒に保建大記あり、觀瀾に中興鑑旨あり、早くも、尊王賤覇の精神を發揮せり。その總裁たる安積澹



泊、ひとり異なりと雖も、彰考館が京儒の排覇的思想を以て益漲したるは、復た疑ふべからず。

こゝに於てか、知るべし、一部の大日本史は、京儒的思想の凝聚物なるを。嗚呼、義公たるもの、何ぞ又この修史の結果が、後年宗家を獲すの原動力たるを豫期せむや。禮儀類典を著し、扶桑拾葉集を撰し、契冲等の國學者を聘して、士道を明にせむとし、楠公の碑碣を建て、明の遺臣朱舜水を禮遇し、孝子節婦を旌賞し、人心の維れ徹なるを救はむとしたる一片好學の念は、自ら知らずして、京儒の新思潮を疏導し、大義名分説は、漸次に世に擴がり、水戸は、終に維新大業の發動地となりしのみ。

關齋派の學は、その極、神儒の調和に歸着す。水戸學、亦た然らざるを得ず。天保十二年、水戸の齊昭、弘道館を開くや、自ら其記を撰して曰く、我が國中の士民、夙夜懈らず、斯館に出入し、神州の道を奉じ、西土の教に資り、思孝無二、文武岐せず、學問事業、その效を殊にせず、敬神崇儒、偏黨あるなく、衆思を集め、群力を宜べ、以て國家無窮の恩を報ずれば、豈に徒に祖崇の志を墜さるのみならむや、神皇在天の靈、亦た將に降臨せむとす。と。こゝに於てか、其廟に孔子を祭るとともに、武甕槌尊を祀り、西土の教

に交ゆるに、神州の道を以てす。神州の道とは、他に非ず、神を敬し、王を尊ぶこと是れ、一言すれば、尊王攘夷の精神に外ならず。

義公の後、數世、水滸しばらく振はず、文公に至りて、復た盛にして、一たび陵夷したる史館、亦た其人あり。長久保赤水、立原翠軒、藤田幽谷等、その最たるものにして、皆慷慨氣節の士、善く水戸の學風を發揮したりき。幽谷の高山、仲細、浦生、君平に於ける關係の如き、最も明かに個中の消息を傳へしものなり。幽谷の子に、東湖あり、その門に會津正志あり、ともに尊王攘夷の木鐸として知らる。東湖の弘道館、越義回天詩史及び正志の新論は、水戸學の何者たるかを説明して、餘蘊なきものなり。

予は、こゝに、歴史上に於ける水戸學、後年の狀勢を詳述せざるべし、何となれば、問題複雑に過ぎ、本篇の主眼と背馳すればなり。之を要するに、水戸學は、決して當時の謂ゆる學たるものに非ず、一言すれば、關齋一派、京儒の遺傳的思想の成形せしものにして、神儒の調和を主とし、國體論に重きを置きし革命的精神のみ。維新の大業は、覇府創立當時に進生せし、反抗的思想たる、這個の水戸學に鼓盪せられ、藩山、中齋等、陽明學派中、事功家の遺風を欽慕せし、青年有爲の士の爲に實現されしものと



いふべく、その餘は、浮浪の徒、傀儡の起倒と毫も擇はず。生きて大名あり、死して美談あるもの、必ず偉人ならず、駢駢馳すれば、蒼蠅も千里を往き、蛟龍躍れば、魚鼈亦た昇天の慶あり。杜甫が、麟龍附鳳勢、莫當天下盡化爲侯王といひしもの、かの二三諸公の事に非ずといはむや。

## 第二十四章 最近の陽明學派

熊澤蕃山の死に先つこと二十二年、寛文九年、三輪執齋生る。又實に陽明學派の翹楚なり。名は有賢、字は善藏、又躬耕廬と號す、京都の人、蕃山を始め、三重松菴三宅石菴、皆京都の人。おもふに、陽明派の開祖中江藤樹、かつて暫く京師に教授せしことあり、又江西書院に學びたる藤樹の門人にして、王學を京師に唱へしもの、二三その人あり。或はその感化ならむか。執齋の祖先は、大和三輪神社の司祝なり、父を澤村自三といひ、醫を業とし、京都に住す、母は若尾氏、執齋六歳の時、母を失ひ、十四歳の時、父を失ひ、市人大村氏に養はれ、後出て、眞野氏を嗣ぎ、後又本姓三輪氏に復し、祖先の祭を爲す。執齋十八歳にして、志を立て、江戸に赴き、佐藤直方に學ぶ。直方は、かつて前に述べし如く、山崎闇齋の高弟にして、固より程朱の學を主張し、痛く王學を排斥せしものなり。執齋その門に在り、親しく朱學を聞きしに拘らず、反つて私に王學に歸し、その多く己に益あるを喜び、之を講究して怠らず、因つて直方の爲に絶たれ、暴言を受るに至る、執齋往いて慰へむと欲すれば、門人の怒に逢うて容れ



られず、是を以て困むこと、數年の久しきに及ぶ、然る後、直方その學を變ずるの意、名利の爲に非ざるを知り、遂に再び相見ること、故の如し。直方病革るの日、子弟に命じ、先づ往いて執齋に告げしむ。執齋往いて之を訪ふ、命すてに絶えて相及ばず、因つて、終夜柩前に侍し、歌を賦して之を哭せり。

執齋、かつて、直方の推薦により、酒井侯に事へしも、後、仕を致して、去り、京都に歸り、尋いで大阪に之き、又江戸に來り、數年の間、居止定らず、後居を下谷泉橋に卜し、講舎を創して、明倫堂といふ。これ關左に於ける陽明學流布の權輿なり。門人頗る衆し。時に徂徠すてに逝き、門下の南郭金華、皆文人のみ、執齋ひとり木鐸を以て自ら任じ、道を講ずる、甚だ力む、耳順を過ぎて、啞咳の患に嬰り、病勢日に熾なり、因つて興して、京師に歸り、寛保四年正月歿す、年七十六。

執齋學術醇正、毅然として師表となり、専ら行實を以て、人を風化し、湖泉の徒と雖も、岐路に迷はざるを得たり。梁田蛻巖が、中井養菴に復する書に曰く、輪氏を微かつせば、姚江の學を道ふを聞くを得ず、その陶鑄するところ、果して、誣ぬず、第今江左の儒人、詞藻を以て名あるもの、南郭金華、諸才子の如き、姑らく、是を置き、鐸を四方に

振ひ、大に聖學を倡ふる、斯人を含いて、其れ誰ぞや。むかし、文中子、道を河汾に講じ、王魏房杜の曹、達材成德、安んぞ他日東都の賢士大夫、體を明かにし、用に適し、寬量公と相弟昆たるもの、輪門に出でざるを知むや。吾儕當に目を拭うて、俟つべし、と。その聲望、想見すべし。然れども、王魏房杜、不幸にして、その人なく、唯だ一人の川田雄琴ありしのみ、その精思力行、又贊たるに足れり。

執齋の功、最も稱すべきは、傳習錄の校刻に在り。これ王學をして、其統を絶えしめざりし理因なり。傳習錄に注あるは、此書を以て始となし、その後、唯だ佐藤一齋の欄外書あるのみ、その他、著書亦た少しとせず、日用心法、四言教講義、雜著の類、皆人間有用の書たるに負かず。

執齋と前後して、三重松齋あり、雄琴と同時に、三宅石菴、中根東里あれども、皆振ふ能はず、陽明學は、こゝに又一弛をなし、以て後來の振興を待てり。

徳川氏の盛時之を前にして、元祿あり、之を後にして、文化文政あり、世を擧げて、奢侈を事とし、士風の廢頹、復た濟ふべからず。就中後者に在りては、すでに後年衰亡の兆を胚胎したる者なり。これより先、寛政の間、白河樂翁、銳意治を圖りしも、殆ん



と救済すべからず。北狄の警、頻りに到り、高山蒲生の徒、諷言を唱ふ、而して、異學の禁は、むしろ、在野學者の懶眠を攪起せしものにして、その結果、頗る觀るべきものあり。實用の學、亦た興り、頓に緩急の用に供せむとす。その尤なるもの三人、佐藤一齋は安永元年を以て、生れ、頼山陽は安永三年を以て、生れ、大鹽中齋は寛政六年を以て、生る。皆姚江に傾き、且つ後世に偉大なる影響を興へしものなり。山陽は別に章を設けて詳述することなし、こゝに専ら二氏の爲に敘述を續がむ。

佐藤一齋名は坦、字は大道、通稱は捨藏、又愛日樓と號し、老吾軒と稱す、江戸の人、父名は信由、一齋はその次子なり。これより先、信由、小菅氏の子治助を養うて嗣となし、長女を以て之に配す、一齋生るゝに及び、治助又一齋を以て義子となし、因つて其家を繼ぐを得たり。一齋幼にして讀書を好み、又臨池の技を善くし、北條氏の兵、小笠原氏の禮、亦た皆之を修む。十二三歳の比、殆んど成人の如く、成童に及びて、嶮然頭角を露し、天下第一等の事を以て、名を成さむと欲す。寛政二年、年十九、はじめて岩村藩の仕籍に上り、近侍の列に入る。この時に當り、一齋、林述齋と同じく學ぶ、述齋本と松平氏、岩村の城主能登守乘繼の第三子、その頃、未だ林氏を嗣かずして、濱町

の藩邸に在り、述齋一齋より長ずると四歳、幼より伴友たり、長ずるに及びて、兄弟の如く、往來學を講じ、概ね虛日なし。又井上四明、鹿見星阜の門に出入し、その講論を聞く。時に世の學者、大抵濫園の餘臭に染まざるはなし、是を以て、辨道、雅蕪二卷を著して、之を駁し、又孝經解意補義一卷を作る。二年八月、故ありて職を免ぜらる。因つて仕籍を脱せむことを請ひ、十月を以て許さる。その翌年二月、述齋の懇懇によりて、浪華に遊び、間大業の家に寓す、大業歴數に精しく、兼ねて識見あり、一齋と相遇ふや、一見舊のごとく、又爲に介して中井竹山に學ばしむ。こゝに於て、日夜切磨、經義を討論し、或は夜半に至る。竹山以て厭ふべしとなさず、反つて、之を喜ぶ。竹山の長子曾弘、詞才絶倫、鹿澤相質して、大に益する處あり。後又京都に遊び、皆川淇園に見え、六月家に歸る、竹山乃ち詩を贈り、又一行の大字を書して、之に與ふ、其語に曰く、困而後廢、仆而復興と。一齋その出處を問ふ、竹山答へて曰く、仆而復興は、王文成の語、首句は今紙に臨んで、自ら加へたるのみと。この一語、他日一齋をして程朱の舊より、陸王の新に轉せしめしこと、復た疑なきなり。

寛政五年二月、江戸に還り、林簡順の門に入りて、その邸内に寓し、はじめて儒業



とす。述齋毎に來訪し、與に講習をなす。四月簡順歿して嗣なし、官乃ち命じて述齋をして、その後を繼がしむ。述齋こゝに於て、はじめ師弟の名を正らす、然れども、日夜同學、なほ舊の如し、一齋専ら心を六經に潜め、傍文辭を學ぶ、交道頗る廣く、松崎謙堂、清水赤城市野隼卿等、皆一時の選なり。時に僧蕉中といふものあり、名は顯常、字は大興、近江の人、詩文を善くするを以て當世に鳴る、その江戸に來るや、一齋常に作るところを示して評を乞ひ、力を得るところ、亦た多しといふ。

文化二年十月、林氏の塾長となり、その門生を監督す、これより門人益す、進み、從遊の士、甚だ衆く、寮舍容るゝ能はざるに至る。然れども、耳提面命、講習倦まず、夜以て日に繼ぐ。その講經の日に當りては、聽衆堂に滿つ、述齋の子欄字を始とし、一齋に師事するもの少からず。一齋の岩村に於ける、すでに仕を致せし後、職事あるなく、唯だ文學を以て、世子を輔導するのみ。文政九年、世子國を承くるや、擢んで、老職となし、以て國事を議せしむ。この時に方り、一齋の名聲藉甚、苟くも道に志し、文學ぶもの、贊を其門に執らざるなく、塾徒は肥薩奥羽の人を併せて、同窓切劔、その質一ならずと雖も、皆篤く信じ、聲音笑貌に至るまで、一齋を模倣するに至る。

天保十二年、齡古稀に隣るを以て、塵事を謝し、以て殘年を養はむと欲し、岩村侯矢藏の下邸に就き、數百歩の地を借り、新に書室に築き、名づけて靜修所といふ。又一樓を築き、名づけて東暖樓といひ、園中蕉桂を種えて、隱棲の所となし、往來安息す。七月、述齋逝去す。是を以て、悽然無聊、益す人世を絶つゝの意あり。この歲、幕府廢政を一新し、大に賢良を擧ぐ、十一月、擢んでられて、儒官となり、昌平黌の官舎に住せしむ。こゝに於て、幡然復た作る。その翌十三年、舊居を以て、女婿河田興に與へ、自ら居を官舎に移し、勉從事、後進を誘掖し、經義を講説し、敢て頼老を以て、之を人に委せず、海内推して山斗となし、景仰せざるものなく、侯伯以下、聘迎講を請ふもの數十家、或は駕を官舎に枉ぐるものあり。凡そ士民の門に入るもの、無慮三千人、四月、特旨を以て、易を將軍の前に講ず、辨說詳晰、賞命あり。これより國家漸く多事なるに従ひ、或は林祭酒を助けて、外交の書を作り、或は幕府の需に應じて、時務策を作り、國政上、頗る裨補するところあり、幕府亦た常に之を優遇す。安政六年六月より疾み、九月遂に逝く、享年八十八。

一齋の門人頗る多く、その中、著明なるもの、佐久間象山、吉村秋陽、山田方谷、奥宮愷



齋竹村梅齋、林鶴梁、金子得所、大橋訥菴、池田草庵、中島操存齋、柳澤芝陵、安積良齋、河田葆海等あり。一齋、資性平緩、學説の異同に拘らず、昌平黉の儒官を以て、紛糾百端の世を終ふ。然れども、晩年陽明學に傾きしは、事實にして、その門人中、名あるもの、亦た然り。著述頗る多く、その中、特に重要なるものを言志四録となす。一歳壯歲にして、言志録一卷を著し、六十を踰えて、同後録一卷を著し、七十にして、同晚録一卷を著し、八十にして、同盡録一卷を著す。この書も、と語録にして、思想の斷片に過ぎずと雖も、不用意の間、亦たその本領を窺ふべく、邦人の語録中、白眉たり。雨森芳洲の橘窓茶話、尾藤二洲の素養錄等、遂におよばず。恐らくは、薛敬軒の讀書錄、胡敬齋の居業錄と伯仲の間に在らむ。その中に曰く、朱陸同宗、伊洛而見解稍異、二子茲稱賢儒、非始獨朔之與洛爲各黨、朱子嘗曰、南渡以來、理會著實工夫、惟某子靜二人、陸子亦謂建安無朱元晦、青田無陸子靜、蓋其互相許如此、當時門人亦有兩家相通者、不爲各持師說相爭、至明儒如白沙、篋墩、餘姚、增城、並兼取兩家、我邦惺窩、藤公、蓋亦如此、と。物議を避くる爲め、故らに然りと雖も、亦た以て其意の在るところを臆度すべし。

一齋の平緩にして、推移的なるに反し、中齋は峻拔にして、革命的なり、その人物及び行動に於て、兩つながら然り。

大鹽中齋、名は後素、字は子起、平八郎と稱す、又居るところの室を名づけて、洗心洞といふ、易の繫辭に本づくなり。中齋は元と徳島藩老稻田氏の臣、眞鍋市郎の二男にして、寛政五年、阿波美馬郡脇町に生れ、幼にして、母を喪ひ、母の縁故を以て、大阪の鹽田喜左衛門に養はれしが、故ありて、之を去り、天滿の與力大鹽平八郎の養子となる。時に年七歳、養父母偶ま其歳を以て没し、養祖父政之丞に因て、鞠育せられしといふ。その幼時、如何にして學を爲しか、今詳ならずと雖も、文武を兼修し、功名氣節を以て、祖先の志を繼がむと欲し、與力の職に居り、閱歷を累ぬるの間、學問の必要を感じたるものゝ如し。こゝに於て、江戸に赴き、林述齋の門に入り、刻苦勵勉、同門の模範たり。中齋又學問の餘暇を以て、力を武術に用ひ、刀銃弓鎗、悉く其技を修め、殊に鎗術に至りては、關西第一の稱あり。會々養祖父政之丞、重症に罹り、その報至るや、倉皇旅裝を整へて、大阪に還りしが、尋いで逝けり。こゝに於て、家に留り、復た與力の職に服す、時に年二十六。文政三年、高井山城守、山田奉行より轉じて、大阪東町奉行となる、その人、盛識に長じ、中齋の才氣絶倫なるを看取じ、擢んで、吟味役とな



す、時に年二十七。大阪の吏人、愛憎に因つて、刑罰を變じ、金錢に因つて生殺を取捨するの風あり。故を以て、市民の吏人を畏恐すること、蛇蝎の如し。中齋この弊を革めむと欲し、邪を折き正を救ひ、奸を懲し、善を助け、就中京都八阪の妖巫益田貢を誅戮し、大阪西町の奸吏弓削新右衛門を割腹せしめたる如き、その最たるものなり。こゝに於て、中齋の名、大に揚がる。

すでににして、山城守、年七十に近く、劇職に堪へざるを以て、病と稱して、骸骨を乞ふ。中齋復た知己に遇はざるを慮り、山城守の辭職未だ允されざるに先つて、致仕し、養子格之助をして、其職を繼がしむ。時に年三十七。これより専ら學を講じ、書を著し、併せて子弟を教授す。天保三年六月、古本大學割目を脱稿して上木し、同月近江に遊び、藤樹書院を訪へり。この行、深く藤樹に感ずるところあり、加ふるに、歸路湖上に泛びて、颶風に遇ひ、反つて良知の旨意を體認するを得たりといふ。その後、數回小川村に赴き、藤樹書院に村民をあつめて、良知の學を講じ、或は近江聖人の再生となせしと傳ふ。天保四年、洗心洞割記と儒門空虛聚悟とを上木せり。割記は、その獨特の學說を叙述せしものにして、一生の心血を注げり。乃ち一本を伊勢の神

庫に獻じ、一本を富士絶頂の石室に藏し、以て後世湮滅するなからむを期す。その翌五年、増補孝經彙注を著はす、以上稱して洗心洞四部書といふ。かくの如くして、中齋は、専ら講學に従事せしと雖も、高井氏以後の諸奉行は、皆その威望と才學とに服し、その施政に關し、往々諮詢せり。就中、矢部駿州の如きは、中齋の最も親善せしところなり。駿州名は定謙、幕末の能吏、後謫せられ、幽囚數年、食を絶つて死す。晩年、藤田東湖と交り、東湖の雜著中、その言行を記するあり、中齋の事に關するもの數條散見す、ともに參核に資すべし。

天保七年春、駿州轉じて、江戸勘定奉行となり、四月二十六日、跡部山城守定弼代つて大阪町奉行に任せらる。山城守、器宇甚だ凡、遂に中齋をして、亂をなすに至らしむ。これより先、天保二三年の頃より、氣候不順にして、年穀登らず、四年に至り、殊に甚しく、その後、又甚しく、七年全國大に饑ゆ。中齋之を坐視するに忍びず、その子格之助をして、山城守に見え、大に倉廩を開いて、貧民を救賑せむことを請はしむ。山城守之に答へ、約するに四五日の後を以てし、中齋大に喜ぶ。然れども、遷延彌よ久しく、遂に其事なし、格之助をして、促がしむるも、又要領を得ず。峻請數回、山城守符



ふるに、江戸へ米穀を廻送するを以て、姑らく賑恤に及ぶ能はざるを以てす。こゝに於て中齋憤慨して措かず。更に轉じて、市井の豪買に説き、金を借りて、自ら貧民を救はむとす。山城守又陰に之を妨げ、百方その術を盡す。中齋乃ち大に怒り、一切の藏書を賣却す、その部數、一千二百にして、價六百五十兩。こゝに於て、一萬枚の切手を製し、盡く之を窮民に施與す。山城守之を聞き、以て名を賣るものとなし、格之助を召して、大に譴責を加へしといふ。凡そ是等の事、すべて中齋を憤激せしめ、遂に一朝その身を忘るゝに至らしむ。今にして、之を思ふに、中齋必ずしも責むるに足らず、その情、大に恕すべきものあり、况んや、その擧たゞ幕府の無法を攻むるに出でしものにして、皇室に對する敬意を失はざるに於てをや、之を呼んで大逆となすは、頗る酷なるのみならず、維新の大業、彼に負ふところ、固より少しとせず。中齋は學者たりしと同時に、自ら革命の犠牲となりしもの、その志や、欽すべく、その命や、悲むべきなり。

天保八年二月十九日、中齋遂に兵を擧ぐ。これより先數日、檄を遠近に移す、その中に下の言あり。

天子は、足利家以來、別て御隠居御同様、賞罰の柄を御失はれ候に付、下民の怨何方へ告懇とて訴ふる方もなき様に亂れ候に付、人々の怨氣、天に通じて、年々地震火災、山も崩れ、水も溢れるより、外の色々様々の天災流行、終に五穀飢饉に相成候、是皆天より深く御誠めの有難き御告に候へども、一向上たる人々心も付かず……天子御在所の帝都へは、廻し米世話も致さる而已ならず、五升登斗位の米を買ひに下り候者共は、召捕などいたし……：堯舜天照皇太神の時代に復しがたくとも、中興の氣象に恢復とて立戻し可申候。

その徒、聚るもの數百人、先づ豪買輩の家屋を焚燬し、倉庫を破壊し、金穀を四散し、貧民の取るに任かす。すでににして、山城守の兵と戦ひしも、利あらず。黄昏に及び、或は死亡し、或は逃散し、餘すところ、僅に八十餘人、乃ち其徒を散し、自ら亦た其跡を晦ます。この日、火勢熾にして、翌二十日に至り、益す甚しく、遂に全市四分の一を焼失す。こゝに於て、逮捕愈よ急、その徒、或は縛に就き、或は自殺し、或は自首するもの、前後數十人、而して、中齋父子の踪跡未だ分明ならず、越えて一月、三月下旬に至り、その一賤買に隠るゝを訴ふるものあり、吏卒來つて之を捕へむとす、中齋之を知り、格之



助とともに火を放つて焚死す、時に年四十四。

中齋の門人、多くは與力なり。然れども、他より遊學せしもの少からず。門人常に四五十人、前後を通じて算すれば千人に上るべし。その中、宇津木矩之允、最も卓偉にして、かつて塾頭たり。中齋の事を擧ぐる前、長崎より還り、其家に在り、中齋之に勸めて、其黨に加らしむ。矩之允、切諫すれども、聽かず、乃ち其僕を郷に歸し、自ら死を期し、同門の士の爲に殺さる。中齋交道廣からず、ひとり近藤重藏と意氣相投ぜり。重藏は、擇捉島の探險を以て名あり。その學識才力、一世に冠絶し、平山行藏、間宮林藏とともに、寛政三藏と稱せらる。兩人はじめて遇ひしときの如き、千古の話柄として傳ふべきを覺ゆ。然れども、中齋が最も尊重せし唯一の知己は、實に頼山陽なりき。山陽は本と文人に過ぎずと雖も、かの誤謬多き外史政記と、格律上、頗る議すべき數十篇の史詩とが、能く維新志士を興起せしめしを思はゞ、亦た斷じて庸流に非ず。山陽は、中齋を以て小陽明となし、中齋は山陽が陽明の文章功業に心服せしを悦び、肝膽相照し、管鮑も管ならず。山陽の詩文、中齋の事に及ぶもの、少くとせず。その天保元年七月、中齋致仕して、尾張に適き、その祖今川氏の跡を弔ひ、兼

ねて舊族を訪はむとするや、送序一篇あり。文字大半煙晦、詳にし難きものありと雖も、慷慨激越、斫地の王郎に對するの慨あり。又かつて中齋を訪ひしとき、趙子昂、蘆雁の圖を觀て、心之を欲し、中齋その意を悟り之を贈りしを謝せしが如き、その歸途、管茶山の遺愛の杖を失ひ、中齋吏をして之を索めて還せしを謝せしが如き、文字の裏面に、無限の情緒を見る。而して、訪大鹽君、謝客而上衛、作此贈之と題せる一篇に至りては、當に中齋の小傳に充つべし。曰く、上衛治盜賊、歸家督生徒、擲卒候門取裁決、左塾猶聞喧嘩、家中不納鬻獄錢、唯有繻々萬卷書、自恨不暇仔細讀、五更已起理案牘、知君學推王文成、方寸良知自昭靈、八面應敵有餘勇、號君當呼小陽明、吾來侵晨未及出、交談未半戒鞭鞭、留我恣抽滿架帙、坐聞蟬聲在層樹、巧勞拙逸不足異、但悲盤折傷利器、祈君善刀時善之、留詩在壁君且視、と。

中齋と一齋とともに林家に學びしも、その初、固より深く相識るに及ばず、洗心洞、劄記の成るや、書を添へて、之に送り、その批評を求む。一齋乃ち復書して曰く、就中太虛之說、御自得致敬服候、拙も兼々靈光之體、即太虛と心得候處、自己にて太虛と覺え、其實意、必固我之私を免れず、認賊爲子之態に相成、難認事と存候、貴君精



々此所御着力被成候得ば、即御得力爰に可有之と存候、尙も實際に御工夫被着か  
しと祈入候事に御坐候。又拙も桃學を好み候様被仰越候處、何も實得之事、無之  
根差に堪ず候、桃江の書元より讀候得とも、只自己の箴砒に致し候のみにて、都而  
之教授は並之宋設計に候……只自己に而乍不及、廻哲之實功を骨折、夫よりし  
て君心之非を格して遂に治務之間にも語り候得ば、漸々人之家國に寸補可有之  
哉に存候。兎角人は實を責ずして、名を責むるものかと被存候、名にて教の害を  
成す事少からず候得ば、務めて主張之念を祛りて、公平之心を求め度候。  
兩者氣風の差、學問の異、亦た概觀すべし。一齋には四録あり、中齋に四部書あり、そ  
の學說の叙述は、餘白なきを以て略す。

○山陽の死、中齋に先つこと五年、而して、中齋死後、一齋なほ存し、ひとり官學の一隅  
に在り、世運の變遷して目撃したる後述けり。その門下の諸家、陽明學を奉ずるも  
の、皆實用事功の人なり。秋陽方谷草庵芝陵、すでに然り。而して、佐久間象山に至  
りては、開港論者にして、宇内の大勢に洞視するところあり、その門に吉田松陰を出  
し、又陽明學に負ふところ少からず、その松下村塾は維新の功臣、健兒時代の巢窟あ  
り。その門弟中、最も草率なるを高杉東行となす、その學亦た同じ。その他、西郷隆  
盛、横井小楠、眞木保臣、鍋島閑叟等、いづれも多少の縁故を有するものなり。○  
之を一概するに、關東に在りては、關齋學の餘派たる水戸學あり、關西に於ては、大  
鹽中齋の爲に振興されし陽明學あり。維新の政治的大變動は、如上兩思想の爆發  
せし結果に外ならずといふも、不可なかるべし。嗟乎、誰か復た學者を以て無能と  
いふものぞ。



## 第二十五章 頼山陽

頼山陽は、一個の文人のみ、經術の造詣如何を以て、之に責むるは甚だ酷なり。然れども、彼が國家經濟に關すると見解と、修史の功と、華洛の司盟たりしとの三事は前後殆んど其匹なく、固より不朽たるべきを疑はず。

山陽の父を頼春水といふ、名は惟完、字は千秋、農家より起り、心を洛閩の學に潛め、三博士の徒と交り、後辟されて藝藩の儒員となり、學制を創定し、頗る敬禮せられ、呼ぶに字を以てして名いはず。その詩文を爲るや、喜んで腹藪を爲し、點竄を加へず、菴茶山之を稱し、思はずして得たるものとなす。著すところ、遺稿十一卷あり。その弟三人、一は惟強、字は千齡、春風と號す、その郷安藝の竹原に在り、醫を業とし、兼ねて詩及び書を善す。その次は惟柔、字は千棋、杏坪と號す、郡宰となりて、治績あり、尤も詩に長ず、著すところ、春草堂詩鈔八卷、傳ふべきの作、その大半は居り、尤も古體に長じ、その險峭を用ひ、奇句を送るや、韓昌黎に神似するところあり、近體の生硬、亦を黃山谷に似たりと稱す。頼氏三人、皆名あり、その家學を想ひ見るべし。

山陽、名は襄、字は子成、通稱久太郎、京に入りし後、三十六峰外史と號す。春水はじめ大阪に寓して、徒に授け、處士飯岡氏の女を娶り、安永九年を以て、山陽を江戸堀に生む。天明元年、春水の聘せられて、廣島に移るや、之に従ふ。山陽生れて鋭敏、甫めて六歳、忽ち母に問うて曰く、天は何如なる物をやと。母曰く、旋轉止まず、彼の如きのみと。山陽遽かに庭に下り、天を仰いで嘆じて曰く、不思議なるかなと。啼泣半時ばかり、八九歳より喜んで、國字本古今軍記を讀み、寢食を忘るゝに至り、嬉戲するや、又土を搏して、城郭軍營の狀を作る。すてにして、句讀を受け、晝夜懈らず、かつて眼を患ふ。父、固く之を禁ずるも、陰讀して止まず。年、甫めて十三、春水祗役して江戸に在り、詩を作つて、之に奇す、柴野栗山之を見て、大に嘆賞を加へて曰く、千秋子あり、之に教へて實材となさず、乃ち詞人たらしめむと欲するか、宜しく其れ史を讀み、古今の事を知らしむべし。而して、史は通鑑綱目より始めよと。會々薩藩文學赤崎元禮、國に歸らむとし、廣島を過ぎて、之に告ぐ、因つて感奮し、日に綱目を讀む、然れども治亂の大勢を記するのみ。書法發明等、讀むを屑とせず、栗山聞いて益す之を奇とす。年十四、五、家學を受け、小學近思錄皆すてに誦習す。一日曝書に因り、東坡



の史論を見詰し曰く、天地間かくの如く喜ぶべきの文あるかと。遂に力を文章に肆にす。年十八、叔父杏坪に従つて東遊し、尾藤三洲の塾に在り、一年にして歸る。才學日に進む。然れども、多病を以て仕籍を免ず、二弟あり、皆夭す。一妹、漢士某に適く、春水因つて春風の子元鼎を養うて嗣となす。元鼎、字は新甫、後府學訓導となり、二十六にして卒す、性聰敏、幼より詞章に工なりといふ。文化七年、菅茶山、山陽を請うてその塾生を督せしむ。乃ち備後に遊ぶ。明年去つて京都に遊び、終に止る。時に年三十二。車屋街に僑居し、銅駝場に移り、又木屋街に徙る。文化十三年二月、春水の疾篤きを聞く、時に徒を聚めて、莊子を講ず。即ち巻を投じて起ち、晨夜之に赴き、京より廣島まで、殆んど百里、五晝夜にして至る。至れば、及ぶなく、遺憾自ら置かぬはず、これより修身復た莊子を講ぜず。これより先、元鼎亦た早世、山陽のはじめ廣島に在るや、藩士御園氏の女を娶り、元協を生む、故あつて、之を去る。こゝに於て、元協嫡孫を以て、祖の後を承く。文政元年二月、父の大祥忌に際し、廣島に歸展じ、喪除くや、遂に鎮西に遊び、豊筑より肥に入り、長崎に留まると、二月、南薩隅を極む。かの耶馬溪の奇勝を探りたるも、亦た此行に在り。三明年、春、廣島に歸り、母を奉じて

京に入り、芳野寧樂の諸勝に侍遊す、秋送つて廣島に至り、爾後西省遊蕩なし。後數ば之を迎へて、伊勢及び琵琶湖等に遊ぶ。山陽すてに客寓家を治むると、險素、妄りに一錢を費さず、然れども、其母を迎ふる、有無を問はず、務めて懼心を奉ず。一日、島原に侍遊し、一大酒樓に登り、妓樂を召して、酒を侑む、朱觥銀盤、その豊美を盡す。從行の婢、之を見て愕然、竊に山陽の袖を引いて曰く、阿主囊中の物、以て之を償ふに足るか。と。蓋し山陽國を去つて定省を闕き、深く自ら悔恨し、罔極の萬一を報せむと欲す、而して春水すてに逝きしを以て、専ら之を母に奉せむとするなり。六年家を置三本木に買ひ、水西莊と稱し、庭中に梅花竹樹を雜植し、扶疎蔭をなし、一小草堂を置き、鴨水に臨み、東山に對し、山紫水明、處稱し春、と花秋葉の候、皆坐して知るべし。候至るや、輒ち童を携へ、瓢を佩ひ、飄然出游、その他、近畿の名勝古跡、游履殆んど遍し。その遊ぶや、期を預せず、興至れば即ち往く。天保元年、胸痛を患へ、久らして愈ゆ、三年六月、忽ち咳嗽を發し、咯血す。醫曰く、これ積年勞神の致すところ、謂ゆる肺血、疾治すべからず、先生は豪傑死を怖れず、故に敢て實を以て告ぐ。一醫曰く、猶ほ療すべし、と。山陽曰く、死生命あり、然れども、我上に老母あり、且つ志業未だ成らず、たと



一生涯なきも、宜しく醫療を加ふべし、我慎んで藥を服し、傍死計を爲さむのみと。時方に日本政記を著す、乃ち日夜勉強して、稿を構ふ。曰く、我必ず之を成して地に入らむと欲すと。秋に及びて、疾益す劇し、母の之を憂へむことを慮り、家人を戒めて告ぐるなからしめ、唯だ報ずるに徹意、尋いて愈ゆべきを以てし、往復の書牘、勉強して筆を執ること、平常の如し。はじめて病みしより、酒を禁じて飲まず、客至れば爲に筵を設け、談笑自若。病すでに革る、曰く、我死方に逼ると。然れども、猶ほ眼鏡を着け、政記を手にし、刪潤して止まず、忽ち左右を顧みて曰く、且つ喧うする勿れ、我將に假寐せむとすと。乃ち筆を開き、眼鏡を脱せずして瞑す。就いて之を撫すれば、すでに逝く。實に九月二十三日、享年五十三。東山長樂寺に葬る。山陽京に入、小石氏を娶り、三男を生む、曰く辰之助、夭す。曰く、又二郎、名は復、支峰と號し、後家を承く。曰く、三木三郎、名は醇、壯にして節に死す。

山陽が西遊中の事實及び逸話に就いては、考察を値するもの少からざれども、餘白なきを以て、こゝに述べてす。彼は才の人なり、詩文を善くし、書畫亦た觀るべし。かの舉世傳播、頼家脚、都門一様字、渾肥といひしもの、其書の當時に行はれしを知る

べく、耶馬溪圖卷記及び書を論ずる詩を觀れば、丹青の技に指を染めしを察すべく、これより得たる偶筆は、彼の生計たりしや必せり。然れども、彼は單に才の人にして止むものに非ず。かつて自ら曰く、我を才子といふは、未だ我を悉さざるものなり、我を能く刻苦すといふは、眞に我を知れり。と。西游稿の詩のごとき、自ら序して、意を経ざるものと云へども、經營刻苦の餘に出でしは、その證、固より多し。坡浦行の古詩の如き、その初稿に於ては、唯だ後半のみ、その他、推して知るべし。經術の如きは、その性の適するところに非ず、唯だ史學に至りては、頗る造詣あり、その見地、頗る高きを疑はず。著すところ、日本外史二十二卷、日本政記十五卷、通議二卷、春秋講義若干卷、先友錄一卷、文集十卷、書後題跋四卷、日本樂府一卷、詩鈔八卷、同遺稿八卷、文稿二卷、その他、韓蘇詩抄、小文規則、古文典型等あり。

山陽の文、叙事に長ず。その主奉するところは、龍門の神髓に在り。而して、論策は東坡に得るところ多し。外史の書、之を歴史として見れば、誤謬固より少からず、且つ其論の如きは、之を前にして、准后親房の神皇正統記、之を後にして、新井白石の讀史餘論に資り、构思創見、殆んど之なしと雖も、一家の私史として、その勞、固より多



くすべく、尊王の精神を鼓吹したるの功固より大なり。蓋し當時の主人和文に嫺はず、故を以て道般の著述は、最も時世に適したるものにして、その普及の盛なる、今に至りて衰へず。而して、某々諸藩の如き、藩學の子弟を戒めて、之を讀むを禁ぜしといふ、その覇府を輕んずるを恐れて然るなり。外史の成るや、二十年を費す、その間、數回稿を改めしは、現存せる自筆の稿本に對照し、兼ねて苦心を見るべし。すてに成るや、猶ほ之を家に秘す、白河樂翁之を聞いて、禮を卑らし、幣を厚し、以て之を請ひ、はじめて世に行はる。一生あり、之を請ひ、後又來り促して曰く、一權貴に獻せむと欲すと。山陽色を正うして曰く、我が史は權門媚を容るゝ具に非ずと。竟に與へず。以てその氣概を見るべし。外史の文、奇氣橫生、固より然るところ。政記は、最も晩年の作、記事多く病中に成る、蓋し栗山潛鋒の保建大記等に倣ふものなり。時に猪飼敬所來り訪ひ、談南北正統の事に及ぶや、議大に合はず。敬所すてに去る。曰く、苟くも、北朝を以て、正統となせば、豈に新田楠諸公を以て、亂臣賊子となすかと。方に之を言ふの時、目張り、眉軒り、その慷慨激烈、病むと雖も、衰へず。遂に正統論を著して、政記初論の後に置く。この書、山陽政後門人輩の手に因つて、整理せられ、水

戸豊田天功の校讎を経て、上木せじものといふ。その他、文集中、載するところ、觀るべきもの少からず。百合傳、高山彦九郎傳、耶馬溪圖卷記等、最も誦すべく、ともに敘事の精緻を以て勝る。若し夫れ、書後題跋に至りては、東坡の小品を讀むが如く、短篇零章、風神絶えむと欲するを疑ふものあり。又その詩を論ずるや、議論甚だ公正を推す。彼は東坡の崇拜者にして、その詩文兩道に長ずると云ふ、亦た頗る相似たり。天才すてに警拔、杜韓蘇三家の詩に於て、最も力を得、七古は、最も得意となせじところ、開闔變化、往々にして測るべからざるものあり。然れども、予の私見を以てすれば、楠公墓下作及び筑後川の長古の如き、罅漏未だ補苴するに及ばず。擅浦行佛郎王歌、倪文正公眞跡引、奥國鐵鈴歌の如き、殆んど完璧を推す。彼は對仗に屑々たるものに非ず、故に律體に至りては、拙を藏するの手段に出で、その作、亦た多からず。七絶に至りては、不用意の中に、頗る得るところあり、風神綽約、左の數首の如きは、予が平時愛誦するものに係り、之を晚唐人の集中に置くも、必ずしも遜色を認めざるべきなり。

蓬窓月、暗樹如烟、拍岸波聲驚客眠、默數浮沈十年事、平公塔下兩維船、



客恨逢春不解消、平蕪斷靄路迢迢、銅駝橋畔千株柳、五見東風上柳條、

危礪亂立大濤間、決嘗西南不見山、鶴影低迷帆影沒、天連水處是臺灣、

蘇水迢迢入海流、櫓聲雁語帶鄉愁、獨在天涯歲將暮、一篷風雪下濃州、

酒家粉壁映晴波、官道迢迢渡浹河、風景依然人欲老、楠公墓下十經過、

夾水層巒翠黯然、深深山驛雨成煙、黃梅時節岐蘇路、回首曾游十五年、

不同此夜十三回、重得秋風奉一卮、不恨尊前無月色、免看兒子鬢邊絲、

山陽の作、いづれも史事に關係あり、最も咏史を喜ぶ、雅に言つて曰く、余、咏物を欲せず、咏物は、咏史に若かず、史中無數の好題目あり、讀者の淺深に隨つて、皆、眞詩を成すべし、之を置いて、雁字鶯梭といふ、爲すなきなり、と。又、竹枝を排斥せり、これ疑もなく、詩佛五山の末流の弊に憤激せしものなり。咏史の作、集中指を屈するに暇あらず、而して、最も傳ふべきを日本樂府となす。全卷六十六闋、蓋し當時日本の國數に象り、歴代の史實を咏じて、盡さざるところなし。田能村竹田、之を評して曰く、六十六闋、吾が邦開闢以來、この文字なかるべからず、而して、人未だ做さざりしもの、と。又曰く、近人詠史の諸作、巧比似て、黠、深に似て、淺、晚唐人劉項元來不讀書等と大抵相

類す、故に余、咏史咏物の二體に於て、甚だ讀むを喜はざるなり。六十六闋の如きは、則ち否らず。毎誦數遍、手を糧くに忍びず、その議論するところ、飄するが如く、論するが如く、或は華、或は朴、漢人の樂府に似、又漢人の童謠に似たり、蓋し山陽の學、古に選才、詩に妙なるが故なり、と。樂府の作、之を上にして、李西涯、之を下にして、尤西堂あり、山陽之を擬せしこと、固より論を俟たずと雖も、その飄諭の本旨に至りては、莫然として異なるものあり、必ずしも、西轍に倣はず、以てその孤詣の處を見るべし。若し之に對するものを求むれば、ひとり中島子玉の咏史樂府あるのみ。

山陽を以て學者となせば、恐らく當時第二流以下なるべし、その家學は洛閩に在り、加ふるに、新創の見を出さず、然れども、彼が大盪中齋と交り、且つ陽明の學に對して、同情を欠かざりしを觀れば、革命的精神を包藏せし熱血兒にして、彼の天職は、之を世に宣布するに在るのみ。この時に方り、一齋、良齋の徒、東都に在り、その著述文章、前古に比なしと雖も、當時の風氣を變じて、人心を動かすの大なるは、到底山陽の什一に及ばず。見よ、かの吉田松陰の如き、その少年、躬耕活を爲すの時、圃上に鋤を杖て、實に、東海大魚振鬣尾を歌ひ、皆を決して、東天を睥睨せしものなるを。文士



として山陽の功豈に偉ならずといはむや。蒙古來の一首の如き長しへに我邦に於ける祖國の歌もしくはマカセーユの曲に充つべきものなり。山陽の門下從學せしもの甚だ衆し。而して文には森田節齋あり、詩には藤井竹外あり、兩者名或は實に過ぎ氣節風流亦た遠く其師に及ばず。こゝに於てか、替人を出さざる彼の才力の獨絶なること、愈よ見るべきなり。

山陽の門下從學せしもの甚だ衆し。而して文には森田節齋あり、詩には藤井竹外あり、兩者名或は實に過ぎ氣節風流亦た遠く其師に及ばず。こゝに於てか、替人を出さざる彼の才力の獨絶なること、愈よ見るべきなり。

### 第二十六章 化政以後の詩壇

山本北山は、該國の勢力を根柢より覆せしものなれども、偶々他人の爲に嫁時の衣を縫ひしに似たるものあり。文に於ては三博士、唐宋大家を準とし、聖堂風、天下を靡かし、詩に於ては、子琴六如寛齋を待つて、はじめて刷新の實を擧げたり。而して、明詩に代るものは、實に宋詩の流行なりき。

葛子琴、名は張、蠡齋と號す、通稱橋本貞元、浪華の人。三博士とともに、片山北海の混沌社より出づ。その詩、今傳るもの少しと雖も、一代の新調をなせしといふ。頼山陽の論詩絶句に曰く、浪速城中朋盍簪、猶從嘉萬索金鍼、茫茫混沌新穿竅、唯有多才葛子琴と。天明四年歿す、年四十七。

六如は、京都智恩院の僧、名は慈周、近江の人。はじめ彦根の野東阜に従ひ、後、江戸の劉龍門に學ぶ、恒に木物二門の末流、時に虚飾多く、實際に乏しきを惜み、はじめて古轍を改め、葛子琴と相並び、盛名あり。享和三年歿す、年六十七。著すところ、六如詩鈔、葛原詩話等あり。香茶山之を評して、近代の宗匠となし、曲園又、その古艶にし



て疏筍の氣なきを稱せり。頼山陽の論詩絶句に曰く、泥犁口業未成空呈佛低當彫  
 琢工、枋畏草廬家數小、鉢盂退出渭南翁と。七律最も工にして、朗誦すべきもの少  
 とせず。紅藕入秋如病妓、青莎不夜有啼螿、青葙風生驚驟雨、白沙潮走誤晴雷、秋  
 露無端催鬢髮、晨星容易滅交親、彈壓旅情憑酒力、支持衰抱策詩勳等、皆警句なり。  
 市河寬齋名は世寧、字は子靜、一字は嘉祥、上毛の人。はじめ、林祭酒の門に入り、學  
 成るや、昌平黌の學員長に補せられ、居ること五年、疾を以て辭して去り、寛政三年、富  
 山侯の聘に應じ、教授二十餘年、老を以て致仕す。寬齋學博く才敏、その詩、清麗奇峭、  
 兼ね有せざるなく、はじめ、樊川を學び、一變して香山、再變して放翁、また諸家を鎔陶  
 して、別に機軸を出す。之を一貫して、主奉するところ、性靈に在り。その社を名づ  
 けて、江湖といひ、小島梅外、柏如亭、大窪天民、菊池無絃等、皆門下に出づ。寬齋性山水  
 を好み、上毛は桑梓の地、佳勝多きを以て、遊涉探賈、盡さざるなし。晩に長崎に遊び  
 吳審と唱和す、文政三年歿す、年七十二。私に諭して、文安先生といふ。遺稿五卷あ  
 り、その詩、頗る自得の趣あり、たゞ推敲の足らざるを惜む。

子琴六如の尊ぶところは、實際に在り、寬齋之を進めて、清新となす、而して、天民無  
 絃に至りては、纖巧に陥り、正に宋詩の弊を極めたり。

大窪天民名は行、詩佛と號す、通稱柳太郎、詩書を善くし、又墨竹に妙、之を以て四方  
 に遊ぶ。ばしめ、山本北山の塾に在り、小壺を以て酒を貯へ、時に出して之を飲む。  
 一日外に出づ。北山塾を視乍ち之を見て曰く、誰ぞや、我門に在つて、この小壺を  
 用ふる。凡そ小を好むものは、輿に天下の大を語るに足らずと。詩佛還つて之を  
 聽き、佛然として復た出て、一大空尊を携へ歸り、之を案上に置き、酒少許を入れ、札々  
 柄を掛ゐて、且つ掛み、且つ飲み、且つ放語す。その狂逸、率ぬ此類。又谷文晁と善し。  
 著はすところ、詩聖堂詩集あり、初編より三編に至る。すでに詩聖を以て堂に名づ  
 け、一瓣の心香、之を少陵に奉ずるに意ありと雖も、その作るところ、甚だ相似ず、詩境  
 超逸、行雲流水の致あるを見る。然れども、咏物を事とするに至りては、纖に失する  
 もの多し。その二を舉ぐれば、荷珠の一絶、情誰採、作韋中珍、碧玉盤堆萬顆銀、忍看微  
 風吹過處、化成金谷墜、樓人といふが如き、即ち是れ。かくの如きもの、遂に一時の好  
 尚を促すに至り、往々にして、謎語に陥るを免れず。

菊池五山名は桐孫、字は無絃、通稱左太夫、高松の人。江戸に出で、市河寬齋に學び



帷を下して教授し、特に詩名あり。文政中、高松侯新に擢んで、記室となし、同姓半隠の後を承けしむ。安政二年(或は曰く六年)歿す、年八十四。その著、五山堂詩稿及び詩話あり。宋詩纖巧の弊は、五山に至りて、愈よ甚し。唯だ工緻を事とするのみ、試にその二三を擧ぐれば、春雁に湖上落梅香已褪、隴間宿麥綠全勻といひ、秋鶯に柳絲減、綠梭全廢、菊蕊分香衣自成といふが如く、題を掩うて、之を讀めば、全く謎語なり。その他、此類多し。

詩佛に咏物あり、五山に竹枝あり、以て前時、遊園時代、古意、少年、從軍、閨怨の題目に換ふ、而して、その詩酒放浪、輕薄の習は、亦た往々にして、往年修辭の徒と相肖たるものあり、暴を以て、暴に易ふ、將に其非を知らざらむとす。古賀精里、かつて其子殺堂が、朋齋詩佛、五山等と舟を墨水に泛べて、賞遊を偕にせしを戒めて、舟中の徒、皆鬼怪なりといひしもの、誠に其故なく、むばあらず。五山、袁隨園に倣つて、詩話を著し、その錢を納れて、人の詩を収録すること、前時江村北海の爲せしところ、に異ならず。山陽が、學吟、爭題、五山知、寸舌、權衡、海内詩といへるもの、即ち是れなり。願みれば、元和偃武の後、詩は、丈山、元政を以て、沈宋となし、なほ五山の風あり、木荻の二家に至り、

一變して、唐明となり、然るに、享元の末流、釘偃、陳腐に陥り、口を開けば、陽春、白雪、聚星、投轄、萬口一辭、人をして臥さむを思はしむ。天明、寛政の宋元、に於ける、すでに上に越べしが如く、纖巧奇僻に陥り、聖得知、分外、清、篇々相承けて、亦た人をして吐棄せしむ。こゝに於て、之に代るもの、清詩あり。

葛西因是の詩文に於けるや、金聖嘆の亞流と稱せらる、是れ期せずして、清人の風に染めるなり。之に次ぐものは、菅茶山にして、實に始めて、王漁洋に尸祝すと稱す。茶山、名は晋帥、字は禮卿、備後神邊の人、家世農商を業とし、學を好み、西山、拙齋と同じく、京都に遊んで、那波魯堂に學び、又竹山、蝨菴と善し、後、郷に歸つて、教授し、其宅の東北に一塾を築き、廉塾といひ、又黄葉山に對するを以て、黄葉夕陽村舎といふ。福山侯、特に俸五口を賜うて、之を優遇し、生徒日に進む。その嘗て、一たび東遊するや、三博士以下、諸藩の儒雅、皆交を容る、就中、頼春水父子と相善し。文政六年、大目付に進み、俸を加へて、三十口に至り、十年、宿痼を以て、起たず、年八十、私に諡して、文恭といふ。その集、黄葉夕陽村舎詩、前後二編あり、その時、各體皆工なり、而して、時を憂ひ、事に感ずるの忱、往々にして、行間に流窮す、亦た彼の中心ある人あり。その開元、翠の一首



題を借つて、憤を抒べ、その懷抱を想見すべく、七律中、耕牛龍盤等の題、皆首句の二字を揃んで題となす、實は題に非ず、命意の在るところ、亦た揣測すべからざるものあり。然れども、語意悲壯、氣骨開張、名作たるを失はず。之を一概して、務めて實際を叙し、淡雅穩秀、艱苦の態を見ず、洪纖兼ね備はり、その得意の候に至りては、往々にして、神韵超朗、自然に絶調をなし、正草諸大家の上に出でむとす。山陽の論詩絶句に曰く、朱絃疏越愛鏗鏘、風格誰爭老禮卿、大句寧無排暴力、終然五字是長城と。蓋し中れり。

關東の詩運、すでに振はず、而して、關西詩を以て、嗚り蔚然家をなすもの、茶山の外に、廣瀬淡窓あり。名は建、字は子基、通稱求馬、豊後日田の人、はじめ時習を趁うて、摹擬自ら喜びしが、弱冠はじめて、唐宋詩醇を讀み、未だ卷を終へずして曰く、天地間、自ら此種の好詩ありと。因つて、舊業を棄つ。はじめ、龜井昭陽に學び、後その徒を延いて教授し、前後籍に上るもの四千餘人、宜園の名、鎮西に高し。大村府内の二侯、禮を厚うして、之を延き、待つに賓師の禮を以てす。安政乙卯歿す、年七十四、私に謚して文玄といふ。淡窓、老子を喜び、折立の著あり、その詩は、遠思樓詩鈔、初編二編あり。

篠崎小竹之に序して曰く、近世善く後進を教育するもの、山陽に於ては、茶山菅翁を稱し、九州に於ては、淡窓廣瀬君を稱す。四方の士、争つて其塾に就き、皆成るところあり、而して後歸る、その業とするところを叩けば、時に由つて入るもの多きに居る以て、其人と爲りと其詩たる所以とを知るべしと。論詩五古一首、この道に於て、三たび眩を折るを知るべし。その末に曰く、我亦丈夫也、李杜彼爲誰、誰明六義要、以起一時衰と。然れども、その規撫するところは、元白率易の調に在り、平淡の中、自ら精彩あり、たゞ家數甚だ大ならず、彦山に日暮天壇人去盡、香煙散作數峰雲といひ、追懷南遊に乳狼夜半來尋食、一徑菅芽踏有聲といふが如き、世に傳誦さるゝと雖も、都府樓瓦の七古の如き、最もその才力を觀るに足る。

淡窓の弟に旭莊あり、名は謙、字は吉甫、別に梅墩と號す、大阪に住し、詩を以て名あり、文久三年歿す、年五十七。梅墩詩鈔十二卷あり、宜園一派の詩、旭莊に至りて、はじめ、其大を成せり。愈曲園之を評する最も詳、曰く、吉甫才氣橫溢、變幻百出、長篇大作は、五花入陣の奇を極め、而して、片語單詞、又雋永味ふべし。鐵硯學人齋藤謙、稱すらく、その構思泉の湧くが如く、潮の瀉くが如く、その口吻に發し、筆端に上るに及べ



ば、馬の坡に注ぐが如く、雲空に翻つて、風葉を捲くが如く、多と雖も、濫ならず、長と雖も冗ならずと。洵に吉甫の詩を知るものなり。吉甫塵務を擺脫して、仕途に入らず、親むところは、墨客騷人、好むところは、江山風月、宜なり、その東國詩人の冠たるやと。又曰く、集中夷鯛の詩、阿波黒崎馬入室の詩、意境醜僻に涉るに似たり、評者あり、曰く、人の取舍各別、滄浪跡、愚の徒、必ず席を割いて之を拒まむ。東坡甌北の輩、相視て莫逆たらむと。頗る知言となす。然れども、吉甫詩律に於て、甚だ細、春夜聞雨の詩あり、濕及琴書、際暖回衾、枕中といふ、初稿及の字、是れ入の字、後之を改む。或は故を問ふ、曰く、その梅雨の詩に似たるを嫌ふのみと。これ亦たその浪りに才情を便ふに非ざるを見るべしと。その詩の美、一一擧ぐるに堪へず、而して予は、潜龍洞伏虎巖、拈花峰の五古と、除夜祭詩、丙午元日の七古とを愛す。淡窓の義子、青村旭莊の子、林外、又ともに詩を善くす。村上佛山、亦た豊前稗田の人、龜井昭陽に學ぶ、即ち淡窓の同門なり。又詩に長じ、明治十二年歿す。宜園門下、又名士多し。中島子玉、雋才を以て稱せられしも、早く夭す。竺五岳、詩書畫を兼ねて、一時に名あり、他に長梅外三洲の父子あり。鎮西の詩、宜園之を捫め、その餘韻、今に至りて、なほ存す。

茶山淡窓と時を同うし、賴山陽は、詩文を以て、華洛の主盟たり。篠崎小竹、その詩文を評して、名を得、又博物を兼ね、その人、頗る俗なりと雖も、その作、亦た傳ふべきものあり。南紀には、寛齋門下の菊池溪琴あり、又一家をなす、之と相和するもの、仁科白谷あり。其人、太だ偉、詩亦た遊覽の作多く、格力極めて高し。之と前後して、中島棕隱、草場佩川、藤森大雅、山田雙堂、野田笛浦、齋藤拙堂、後藤松陰、坂井虎山、藤井竹外、奥野小山、大槻盤溪等あり。或は詩を以て業となし、或は文を兼ね、然れども、未だ一人の梁川星巖に及ぶもの、あらざるなり。

梁川星巖、名は孟緯、字は公圓、一字は無象、詩禪道人と號す、通稱新十郎、美濃安八郡曾根村の人、享保三年、再めて十五、家を弟某に附し、江戸に遊び、業を山本北山、古賀精里の門に受け、幾もなくして歸りしが、二十二、又江戸に出づ。星巖最も詩に長ず。當時詩佛、五山、最も名あり、而して、星巖は、温雅深厚、二雅の風あり、主として、唐詩を學ぶを以て、却つて之を壓すに至る。後に其妻張氏、紅闌とともに四方に吟遊する。二十二年、長崎に在るや、清客江芸閣等と唱和す。すでにして、復た江戸に還り、玉池吟社を建て、諸生に教へしが、後京師に移り、鴨漣に住し、賴山陽と相驪ぶ。山陽一世



を藐視して、名を擅にす。而かも、詩に於ては星巖を推す。星巖又かつて曰く、余が  
名をなすものは子成なり。子成の詩を成すもの余功なしとせずと。こゝに於て、  
二人各所長を以て、山斗の目あり。嘉永中、米艦屢ば來りて互市を請ひ、幕府詔を矯  
めて政を失ふこと多し。星巖もと慷慨の志あり、これを憂ふること甚し。安政五  
年秋、閑老間部詮勝、京師に上り、處士を逮捕せむとす。星巖慨嘆の詩二十五首を作  
り、以て時弊を譏る。すてにして、疾に罹り、この歳九月歿す、年七十。著はすところ、  
星巖集、甲より戊に至る二十五卷、閨集一卷、遺稿八卷、別に春雷餘響十卷あり。

星巖、精思績學、力を用ふること厚く、從來宋を學ぶの淺俗を排して、唐人を宗とす。  
詩律精嚴、前古に匹なく、卓として、一代の鉅匠なり。而して、その風骨俊俏、才調清絶  
なるもの、實に近世清人と相類す。おもふに、力を清人に得るところ多きに拘らず、  
其舊に從つて、假りて唐を標榜せしに非ざるが。その詩、風月に留連し、登臨憑弔す  
るの作多く、境地變化して窮らず、林號の序に、煙霞風月を以て室宇となし、江湖山林  
を苑囿となし、鳥獸禽魚花木竹石を臣僕姬妾となすといふもの、決して謬らず。諸  
體兼長、就中七律に於て、最も造詣を見る。その佳聯、燈影最宜秋冷澗、酒香剛和夜氣

風鶴閉益見昂藏氣、翠古方成疏泛聲、夜靜溪聲徹入戶、天寒月色淡籠花、寒風有力吹沙  
走、枯葉無聲借雨鳴、左計應問棋敗局、養心聊學筆藏鋒、漁花網已先春結、載酒船應待月  
剡、千樹葉紅寒水見、一絲髮白夕陽知、詩境或從貧後進、酒杯未肯病來拋、青意漸回人字  
柳、東風微峭虎文波、の如き、清辭麗句、皆誦すべきなり。

星巖、晩年深く心を道學に潜め、就中姚江の學を喜べり。遺稿後編四卷、すべて論  
學の詩なり。これを以て、淡窓が老莊の學を好み、杏坪が宋儒の理學に耽りしに比  
す、まことに好一對なり。星巖の室紅闌、又詩を善くす、閨房倡和、當時之を艶とす、小  
集二卷あり。

星巖は、寛政以後の大詩人にして、その門に出づるもの、太沼、枕山、小野、湖山、森、春濤、  
岡本、黄石、遠山、雲如、江馬、天江、鈴木、松塘等あり。維新以後の詩家、大抵三大派をなす。  
その一は、鎮西宜園の末流、その一は、岡本花亭一聲の門に出でし、江戸詩客中の遺老  
にして、他は、すべて星巖門下なり。枕山、下谷吟社を創し、頗る勢力ありしが、晩年頗  
る頽唐、その門下の雪江、蘆洲、すてに逝き、その餘、皆論ずるに足らず。湖山、黄石、靈光  
なほ巍然たれども、その門、亦た才俊を出たさず。松塘、墓木すてに拱す。天江の徒



西洛に棲運すれども、又消息を聞かず。明治以後、森春濤ひとり名あり、その茉莉菴  
 凹處に於て、新文詩を發刊し、東京才人絶句を編したるが如き、風雅を奨進したるの  
 功、固より大なり。春濤逝いて、すてに十年、令嗣槐南、箕裘を嗣ぎ、その名、海の内外に  
 震ふ。方今詩を道ふもの、皆之を宗とす。而して、主奉するところは、皆清の諸家之  
 を前にして、吳梅村之を後にして、吳蘭雪、頃ろ坡谷を學ぶに意ありといひ、或は以て  
 詩壇革新の兆となす、その旨、或は然らむ、予輩は刮目して、その前途を嚮望せずむば  
 あらざるなり。

近世儒學史終

早文社 三三二

62

395



